

ファウスト本とファウスト伝説の研究：民衆本『ヨーハン・ファウストゥス博士の物語』において、何故メフォストーフィレスは犬に変身しないのか

金山，正道

<https://doi.org/10.15017/2332619>

出版情報：文學研究. 84, pp.133-189, 1987-02-28. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

ファウスト本とファウスト伝説の研究

——民衆本『ヨーハン・ファウストゥス博士の物語』において、
何故メフォストーフィレスは犬に変身しないのか——

金山正道

十六世紀後半から今日に至るまでおよそ四百年の間に、数多くのファウスト作品が書かれているが、それらは、ジャンルという点で、あるいは作品の内容・性格という点で多様であるとはいうものの、素材史という面から見れば、すべて窮極的には、モデルたるひとりの人物、いわば原存在としての実在したファウスト（じ）に源をもつ。この人物無くしては、ドイツの、否、世界のファウスト文学は存在しえなかつたといつても過言ではあるまい。けれども、文学的創作とよりかかわりの強い、この意味でより直接的な、ファウスト文学の源泉は、実在したファウストよりもむしろ、ファウストという名の人物を話の中心に据えて産み出された種々の説話、すなわちファウスト伝説と十六世紀におけるファウスト伝説の初の集成物としての民衆本『ヨーハン・ファウストゥス博士の物語』（一五八七）にある。つまり、十六世紀のファウスト伝説と民衆本『ヨーハン・ファウストゥス博士の物語』のなかにすでに、のちのファウスト作品において取り上げられたさまざまなテーマの原型・発端・暗示が含有されていたのであるが、こう述べた意味は、単に、のちの詩人や作家たちが直接あるいは間接的に十六世紀の素材から適宜個々のモチーフを汲み取ったというだけのことではなくて、また、後世の文学的天才によって取り扱われた問題の暗示、それら文学的天才たちの

内的葛藤と共鳴しうる二極対立的構造が、対立の融和されないままのかたちで、十六世紀のファウスト伝説と民衆本の『ファウスト』——とくに後者——のなかにあった、ということである。

ところで、実在したファウスト、ファウスト伝説、そして一五八七年秋マイン河畔のフランクフルトで印刷業者ヨーハン・シュピースによって出版された民衆本『ヨーハン・ファウストウス博士の物語』（以下、ファウスト本、と略記する）⁽²⁾、これらの関係について、これまで述べたところから、〈実在したファウスト↓ファウスト伝説↓ファウスト本〉という発展の図式が想定されるかもしれない。しかし、この図式をわれわれは決して盲信してはならない。なぜなら、〈ファウスト伝説↓ファウスト本〉という過程についていえば、ファウスト本においては、物語を構成する六十八の章すべてに典拠があるが、それらの典拠はかならずしもファウストと関係のあるものとはかぎらないからであり、また、〈実在したファウスト↓ファウスト伝説〉という過程についても、ファウスト伝説の生成に際しては、ファウスト以外の魔術師や占い師たちにまつわる話がファウストに関するものとして転用されるという事態がときに生じており⁽³⁾、ファウスト伝説はかならずしも史実から発生したものとはいえないからである。しかも、実在したファウストとは無縁のところ起源をもつモチーフのなかに、しばしば、今日までつたえられている有名なものが見出されるのである。とはいっても、ファウストに関する説話の生成・発展過程を巨視的にみれば、そこにはたしかに〈実在したファウスト↓ファウスト伝説↓ファウスト本〉という図式がやはり根底にあり、この図式に見る流れは恰度、山より流れ出し扇状地の下を通過して裾野に湧き出す水のさまのごときである。従って、この図式は絶対的な公式ではないが、ファウストに関する個々の説話の生成と発展を考える際に一つの有効な指針となるものであるといえよう。

さて、このように述べてくると、ファウスト伝説とは、ファウスト本の刊行前に生成していた、ファウストに関する伝説であるという印象を与えるかもしれない。ファウスト本に関する研究との関連で重要なのは、たしかにそれ、



図1



図2

すなわちファウスト本の刊行前に生成していたファウスト伝説である。しかしながら、ひとくちにファウスト伝説といっても、それは大きく二つに分けられうる(4)。すなわち、ファウスト本の刊行前に生成していた伝説とそれ以後に生成した伝説である。本論において後者はほとんど考察の対象とはなりえないが、この機会に、後者のなかでもおそらくは最も有名なものであり、実在したファウストとは無縁のところにおける起源をもつ、アウエルバッハの酒場におけるファウストの樽乗りの話に言及しておこう。

話をつたえる二枚の絵がある。一方の絵には(図1参照)(5a)、楽器を掻き鳴らし、樽にまたがって酒場から出てきたの地下酒場に掛けられていた、この

ファウストとそれに驚嘆する学生たちが描かれている。注目すべきは、絵の下に記された次の詩句である。

「ファウストゥス博士、只今

ワイン入りたる樽にまたがり、はや、

アウエルバッハの酒場より出て来たり、

それあまたのひとびと見しところのことなり。

かかることを彼その巧みなるわざにておこないしが、

それによりて悪魔の報いを受けたり。」(6)

さらに、ラテン語で書かれた二行詩が付されている。

「飲めそして無心に振舞え、だが思いいだけせ、ファウストゥスと彼が受けし

罰とを、それは遅ればせにやってきたが、彼は無惨な目にあつたのだ。」(7)

これらの詩句と絵からだけでは、ファウストの樽乗りの話の内容はまだ十分にはつかめないかもしれない。ここで、有力な手助けとなるのが、ライプツィヒとエルフルトを舞台とする六つの章があらたに加えられたファウスト本一五八九年版(8)の第五十章である。その内容は次のとおりである。

ファウストは数人の学生たちとともに、見本市が開かれているライプツィヒへ行き、ある酒蔵の前を通りかかる。そこでは、数人の樽運びをしている人足が特大の樽を蔵から出そうとしているが、彼らはどうしてもその樽を運び出すことができない。それを見て、ファウストは、人足を愚弄する。そのためファウストと人足たちとの間で口論がはじまる。そこへ酒蔵の主人がやって来て、酒のはいったその樽をひとりで運び出したものにはそれをやるうと、まさかできはすまいという気持ちで、持ち掛ける。そこでファウストはまるで馬にまたがるように樽にまたがってさっと酒蔵から出て来る。酒樽を手に入れたファウストは、その樽の酒を学生たちにふるまう、以上(9)。

ファウスト本一五八九年版、第五十章の話と上掲の絵——話の筋からいえば、図2から図1へ、という順序になる——および詩句の内容を総合すれば、アウエルバッハの酒場におけるファウストの樽乗りとそれに続く学生たちとの酒宴のありさまを思い浮かべることができよう。もっとも、この樽乗りの話は実在したファウストとは無縁の虚構である。そもそも、ファウスト本の諸版⁽⁹⁾やファウストに関する文書のなかで、ファウストの樽乗りの話がはじめて現われるのは、右に挙げたファウスト本一五八九年版においてである。しかしこの版では、話の舞台はすでにライプツィヒと指定されているが、アウエルバッハの名はまだどこにも見当たらない。ファウストの樽乗りの話とアウエルバッハの酒場とが結び付けられたのは、カール・キーゼヴェーターも述べているように⁽¹¹⁾、商魂逞しい酒場の主人が自分の店にひとをひきつけるための、つまり客足を得るための手段としてこの伝説を利用した結果であろうと推測される。なぜそのように推測されるかは、次に述べることから明らかになる。

アウエルバッハの酒場に掲げられていた二枚の絵にはそれぞれ一五二五という西暦年数が書き込まれているが、これはそれらの絵の成立年を示すものではない。このことは研究者のあいだではよく知られていることであろうが、あらためてここでその理由を述べておく。まず、それらの絵に描かれた学生たちの服装であるが、それは十七世紀に広まったスペイン風の装束である。従って、十六世紀の画家が百年後の衣服を予見しえたということはまずありえないから、一五二五という数字と絵の製作年とは結びつかないのである。また、そもそもアウエルバッハの建物は、哲学と医学の博士であったハインリヒ・シュトロマー⁽¹²⁾の考えによって、一五三〇年に築かれたということにもう一つの理由がもとめられる。一五三〇年に造られた建物のなかで、一五二五年にどうしてファウストが樽乗りや学生たちと飲めや歌えの乱痴気騒ぎをなしたであろうか。一五二五という数字は、商魂逞しい酒場の主人が、古い具体的な年数のついた絵を掲げることによって自分の店でおこなわれたとするファウストの樽乗りの話を客たちに信じ込ませ、より多くの客足を得るために、書き込ませたものであろうと考えられるのである⁽¹³⁾。

かつて「小パリ」と呼ばれたライプツィヒ、この町のアウエルバッハの酒場跡を訪れたことのあるひとなら、右に述べた樽乗りの話を知っているであろう。けれども、この伝説をひとびとに、それも国境を越えて広く知らしめたのは、おそらくは何よりもゲーテの『ファウスト』であろう。ゲーテはすでにライプツィヒ大学の学生時代にアウエルバッハの酒場を訪れており、そこでの体験、そこで得た知識がのちに『ファウスト 第一部』のなかの一場として結実する。——メフィストーフェレスはファウストを世俗的享楽に浸らせて誘惑しようと、老練な、けれども満足を得られぬその学者をライプツィヒのアウエルバッハの酒場へと連れていく。そこではフロッシュュ、ブランダー、ジーベル、アルトマイヤーという学生たちが酒宴を催し、乱痴気騒ぎをしている。伝説においては、魔法を使うのはファウスト自身であるが、ゲーテの『ファウスト』の場合には、学生たちに魔法をかけて望みどおりの酒を出してやるのも、樽乗りの魔法をおこなうのもメフィストーフェレスである。ファウストとはいえ、嫌気がさした様子でただ傍観しているだけである。その一場でファウストに与えられた台詞は、メフィストーフェレスに向かって言われる「もうそろそろ出てゆきたいがね」(二二九六行)⁽¹⁴⁾だけである。魔法をつかって場々と樽乗りをやってみせる伝説のファウストとゲーテの戯曲におけるファウストとの相違は著しい。初期の形態と後世の創作との違いがはっきりとあらわれている。

この一場でメフィストーフェレスがつかう魔法に関しては、ゲーテの『ファウスト』では、樽乗りよりも、乱痴気騒ぎをしている四人の学生に、それぞれが所望する酒を、テーブルに穴をあけてそこから出してみせるという魔法が中心となっている。この魔法は、樽乗りと同様に、ファウスト本一五八九年版に見出され、その第五十三章に次のようにある。

「ついに彼（ファウストウス博士）は十分に酔い、彼らにいたずらを始め、皆さんは外国の酒を一つ二つ飲んでみたくありませんか、と言った。彼らが応と答え、それから彼がさらに、レファル、マルヴァジル、スペイン、それと

もフランスのどの酒にしましようかと尋ねると、ひとりが笑いながら、それら全部が良い、と答えた。やがてファウストウスは錐を求め、テーブルの板の横に四つの穴を次々にあけはじめ、樽に栓やコックをさすように、木釘をさし、新しいグラスをいくつか持つてくるようにいった。それが終ると、彼は木釘を次々に抜き、まるで四つの樽からでもあるように、この枯れたテーブルの板から、めいめいに、上に挙げた酒のなかからどれが欲しいか尋ね、どれでも与えた。客たちはふしぎがり、笑い、上機嫌になった¹⁵。

ここでも、魔法をつかうのは、メフォストーフィレス (Mephostophiles) ではなく、ファウストである点が、ゲーテの『ファウスト』と比較した場合の目立った違いであるが、魔法それ自体はほとんど同じであり、テーブルにかけられる穴の数も同じである。ただ、こう述べたからといって、ゲーテがファウスト本一五八九年版からこのモチーフを汲み取ったなどという気は毛頭ない。示さんとするところは、このモチーフの古さであり、後世のファウスト文学のモチーフの源泉が多く十六世紀にもとめられるということの例である。

さて、本論では、〈実在したファウストとファウスト伝説〉および〈ファウスト伝説とファウスト本〉という過程について、とくに後者に力点を置いて考察する。すなわち、ファウスト本に見出される一つ一つの話またはモチーフ、あるいはもっと小さな単位としての、話の構成要素(これを以下、便宜的に、説話構成要素と呼ぶことにする)がどのような過程を経てファウスト本におけるところのかたちになったのか、という問題に関する考察であり、これが第一の考察(一方での考察)となる。その方法としては、処々に散在する、ファウストに関する説話の多くに共有された、重要なモチーフと説話構成要素に関して、文献の記述をおいながら、ファウスト本に至るそれらの変遷もしくは発展の姿および初期的形態を提示するというやり方をとる。この場合、取り扱われるモチーフおよび説話構成要素の重要性は、一つには、それらの一つ一つが、異なるひとつひとつによって書かれたいくつものファウストに関する説話に

よって共有されていること、つまりは、いくつもの文献にあらわれるものであること、また一つには、それらによって、『ヨーハン・ファウスト博士の物語』およびこの物語の成立前に生起していたファウストに関する説話が特徴づけられていること、別言すれば、それら無くしては物語の展開が考えられないこと、あるいは説話の生成も促進されなかったであろうこと、にまずはもとめられる。さらに、後世のファウスト文学との関係において生ずるところの重要性があるが、これについてはのちに言及する。これらの重要性をもち、それによって扱うべきものとして選択されうるモチーフおよび説話構成要素は、次の四つである。すなわち、「悪魔の化身としての犬」⁽¹⁶⁾（以下、魔物の犬、と呼ぶ）、「悪魔の化身としての馬」⁽¹⁷⁾（以下、魔物の馬、と呼ぶ）、「ファウストと悪魔との契約」⁽¹⁸⁾（以下、「ファウストの恐ろしい最後」⁽¹⁸⁾）。

ところで、これら四つのなかで、「ファウストと悪魔との契約」は、ファウスト文学において一般に、不可欠のモチーフではあるけれども、本論では扱わず、これについては稿を改め、別途に究明する。というのも、十六世紀、より正確には、ファウスト本刊行前、すなわち一五八七年よりも前の時期に書かれたファウストに関する文書——実在したファウストに関するもの、伝説上のファウストに関するもの、の別を問わず——のなかには、ファウストが悪魔を、「魔物の犬」または「魔物の馬」というかたちで、従者として述べているものはあっても、ファウストが悪魔と契約を結ぶ場面が記されているものはない。つまり、「ファウストと悪魔との契約」については、ファウスト本刊行前のファウストに関する文書にはその具体的記述がなら見出されない——実はこのことによつてすでに、取り扱うべきモチーフまたは説話構成要素を選択する際の基準として挙げた重要性、すなわち複数の文献によって共有されていること、およびファウストに関する説話の特徴的要素となつていて、その条件を満たしていないのだが⁽¹⁹⁾——のに対して、他の三つは、ファウストに関する十六世紀の文書に繰り返しあらわれるところの、いわばおさまりのねただからである。すなわち、研究資料の面からいえば、「ファウストと悪魔との契約」を除いた三つ

についてはほぼ同一の資料が用いられることになるが、「ファウストと悪魔との契約」については他の三つの場合とは異なる資料が使われねばならないからである。因に、ひとが悪魔と契約を結ぶということは、本来、テオフィルス伝説をはじめ、いくつかの宗教上の伝説もしくは聖人伝にあらわれるモチーフであり、また十六世紀に真剣に糾明された宗教的・社会的問題である²⁰。つまり、ファウスト本における「ファウストと悪魔との契約」は、実在したファウストやこの人物を核として発生した伝説に由来するものではなく、実在したファウストがあらわれるまえからあった、「ひとと悪魔との契約」というモチーフ、否、論題が、『ヨーハン・ファウストゥス博士の物語』を作成する際にファウストにも向けられた結果生まれたものなのである。

さて、他方、ファウスト伝説とファウスト本の思想的特性について考察するが、具体的には、プロテスタンティズムの影響、とくにファウスト本とファウスト伝説にあらわれたカトリック攻撃を、上に選定したモチーフおよび説話構成要素との関連のなかで、扱う。というのも、この宗教上のイズムが、程度の差はあれ、上に選定したモチーフもしくは説話構成要素のいずれにも内在しており、見方を変えると、このイズムがそれらのモチーフや説話構成要素を生成させた、あるいはその生成・発展を促進させた、一つの原動力となっていると見ることもできるからである。つまり、このイズムがそれぞれのモチーフや説話構成要素に特定の性格を与え、十六世紀におけるそれらの変化・発展の方向を決定したと考えることができるのである。そこで、これらのことを証明するためにも、ファウスト本とファウスト伝説に内在し、それらに宗教的性格づけをしている反カトリック主義²¹を、文献の記述をおいながら具体的に呈示し、さらにそれがファウストに関する説話の生成・変化・発展とどのようにかかわっているかを解明することが、他方での考察となる。この第二の考察の後半で、本論の副題とした論題〈民衆本『ヨーハン・ファウストゥス博士の物語』において、何故メフォスト・フィレスは犬に変身しないのか〉が扱われる。結局、以下においてたてられる「見出し」は、全部で五つ（「魔物の犬」、「魔物の馬」、「ファウストの恐ろしい最後」、「ファウスト本とファウス

ト伝説におけるプロテスタンティズムのあらわれ」、および「民衆本『ヨーハン・ファウストゥス博士の物語』において、何故メフォスト・フィレスは犬に変身しないのか」になる。

一、魔物の犬

最初に扱う文献は、一五四八年バーゼルで出版された、ヨージン・ガストの著作『食卓談話』第二卷⁽²²⁾であり、そのなかにファウストに関する二つの説話が見出される。ヨージン・ガストはブライザハの出身で、一五二九年から一五五二年までバーゼルのプロテスタント教会で牧師をしていたひとである⁽²³⁾。ガストの説話を最初に取り上げることには、次のような三つの理由がある。

一つは、ガストによってつたえられるその二つの説話は、初期のファウスト伝説に属するということである。実在したファウストに関するこれまでの研究によれば、実在したファウストは一五三六年から一五四一年までの間のある時期に死亡したと考えられる⁽²⁴⁾。従って、ガストの著作『食卓談話』第二卷は、実在したファウストの死からはやければ七年、おそくとも十二年のうちに出版されたことになる。そして、問題の、ファウストに関する二つの説話は出版よりも前の時期に書きつけられ、説話そのものの生起は書きつけられたのよりもさらに前の時期にあると見ることができよう⁽²⁵⁾。

もう一つの理由は、ガストによって書きつけられた、ファウストに関する二つの説話は、以下において扱うべきものとして選定した五つの「見出し」すべてと関連をもっている、ということにある。

最後に——これは、第一の理由と関連しているが——、「魔物の犬」、「魔物の馬」および「ファウストの恐ろしい最後」、いずれについても、ガストによって書きつけられた、ファウストに関する説話に見出される記述が、今日われわれが利用することのできるファウストに関するすべての文書における最古のものである、ということが挙げられ

る。

以上三つのことから、ガストの著作『食卓談話』第二巻におさめられた、ファウストに関する説話から出発することの正当性が理解されよう。

そこで、まず、ガストによって書きつけられた、ファウストに関する二つの説話のうち的一方——以下、こちらを、ファウスト説話(一)、もう一方を、ファウスト説話(二)と呼ぶ——を引用する。

ファウスト説話(一)

「私が彼〔ファウストウス〕といっしょにパーゼルの大きな神学校で食事をしたとき、彼は料理人にいろいろな鳥を渡したが、そのころパーゼルで鳥は全然売られていなかったので、彼がそれらの鳥をどこで買ったのか、あるいは誰がそれらの鳥を彼に譲ったのか、私にはわからなかった。そしてたしかにそれらは、このあたりでは見たことのない鳥だった。彼は一匹の犬と一頭の馬を連れていたが、それらは、思うに、悪魔だった。というのも、かれらは何でもやることができただからだ。数名のひとから私が聞いたところでは、その犬は時おり召使いの姿をして、彼のところに御馳走を運んできたという。哀れにも、彼は恐ろしい最後を遂げた。というのも、悪魔が彼を絞め殺したからだ。棺におさめられた彼のからだは、ひとびとが五たび反対側に曲げてみたが、いつも顔の上にあった。」⁽²⁶⁾

ファウスト伝説の生成過程を検討してみると、そこにはいくつかの主要なメカニズムのあることがわかる。それらのメカニズムの特性を漢字二字の熟語で簡潔に表現すれば、「転用」、「誤解」、「誇張」または「誇張」、そして「捏造」となる。このなかで、「転用」の例がファウスト説話(一)に見出される。ファウスト伝説の場合、「転用」には二種類あり、一つは、ファウストとは本来無縁の話にファウストを関与させる——多くの場合ファウストがその話の中心人物となる——ことによって新たな説話を生成する、というものであり、もう一つは、有名な魔術師や占い師たちの特徴や付属するものをファウストに付与する、というものである。ファウスト説話(一)における「転用」は後

者である。それではいったいファウスト説話(一)のどこで転用がおこなわれているのであろうか。

結論をさきに述べると、ファウストの従者であり、悪魔の化身と推測されている犬、つまり「魔物の犬」こそが、他の人物に付属していたものがファウストに付与された結果生まれたものなのである。そして、この「他の人物」とは、ヨハネス・トリテーミウス⁽²⁸⁾の弟子であり、秘術に携わっていたハインリヒ・コルネーリウス・アグリッパ・フォン・ネットスハイム⁽²⁹⁾であって、彼は一匹の兎犬を連れており、その犬に「ムッシュー」と呼びかけていたことがつたえられている。しかも、その犬が悪魔であるという噂がアグリッパの生前すでに生じていた⁽²⁹⁾。つまり、ファウスト説話(一)にでてくる「魔物の犬」は、アグリッパ伝説の一要素がファウストに付与された、「転用」の例なのである。

このことを理解するための助けとなるのが、フィーリプ・メランヒトンの『語録』(一五六三)⁽³⁰⁾——これは、メランヒトンの弟子であったヨハネス・マンリウスが、日々書きとめていた師のことを、師の死後まとめて出版したものであるが——に見出される次の記述である。

「魔術の無益さについての小さな本を書き、悪魔である一匹の犬を連れていた奴と同じように、生前彼〔ファウストゥス〕は、悪魔である二匹の犬を連れていました。」⁽³¹⁾

「魔術の無益さについての小さな本を書き、悪魔である一匹の犬を連れていた奴」とはアグリッパのことであり、メランヒトンの『語録』においては、アグリッパ像とファウスト像が対照されているのがわかる⁽³²⁾。

結局、ファウストの従僕である「魔物の犬」は、実在したアグリッパが連れていた「一匹の犬」にその源泉がもとめられ、アグリッパ伝説、それも、アグリッパの生前から生起していた伝説もしくは噂の段階ですでにこの犬が悪魔の化身、すなわち「魔物の犬」とされていたのである。そして、ガストのファウスト説話(一)においては、ファウストの従僕として、「魔物の犬」にさらに「魔物の馬」が加わり、「一匹の犬と一頭の馬」となっているが、そのあと

メランヒトンの『語録』ではこれが「二匹の犬」に変わるのである。それでは、ファウスト本ではどうなっているであろうか。

ファウスト本においては、ファウストの従僕としての悪魔は、メフォストーフィレス (Mephistophiles) と呼ばれ、平生はもはや動物の姿をしておらず³³、ひと、それも修道士の姿をしている。なぜ、ファウスト本において、メフォストーフィレスは犬に変身しないのかということについて、ヴィルヘルム・マイヤーは次のように述べている。

「ファウスト本の著者は犬をつかうことはできなかった。この作品では、哲学的な事柄に関する程度の高い論議や教授がおこなわれることになっていた。それゆえ、著者は、従僕たる悪魔にひとのからだ、修道士の外観を与えて、その悪魔をメフォストーフィレスと名づけたのである。」³⁴

哲学上の問題に関する論議や教授がおこなわれるのであるから、もはや犬ではなく、識者としての修道士の外観が従僕たる悪魔に与えられたとするマイヤーの見解にはなるほど一理あるように思われる。しかし、なぜ修道士が選ばれたのか、他の知識人、たとえばプロテスタントの牧師ではいけなかったのかという突っ込んだ問いに対する答えは、マイヤーの右の見解からは得られない。この問いに対する答えを、われわれはのちにおこなう考察からひきだすことになる。

ところで、「魔物の犬」に関する考察からは逸脱することになるかもしれないが、前に指摘した、ファウスト伝説の生成における「転用」のもう一つのパターン、すなわち、ファウストとは本来無縁の話にファウストを関与させるというやり方による説話の形成の一例が、ガストのもう一つのファウスト説話に見つかるので、ここでそれに言及しておく。そのため、ファウスト説話(二)を引用する。

ファウスト説話(二)

ファウスト本とファウスト伝説の研究(金山)

「かつて、彼（ファウストゥス）はあるとても裕福な修道院に立ち寄り、そこに宿泊した。ひとりの修道士が彼に水っぽくておいしくない並みの葡萄酒を出した。ファウストゥスは彼に、貴人たちにいつも出している、ほかの樽のもっとおいしい葡萄酒をくれと頼んだ。するとその修道士は言った。『私は鍵をもちません。院長はおやすみになっていて、お起こしするわけにはまいりません。』ファウストゥスは答えて言った。『鍵はあの隅にあるじゃないか。鍵をとって、左側に置いてある例の樽をあけて、酒を持って来てくれ。』修道士は、私は院長からお客様方にほかの葡萄酒をお出ししてもよいという許可をいただいております、と言って断わった。これを聞いて、ファウストゥスは言った。『近いうちにお前は奇っ怪な目に会うぞ、この客あしらいの悪い坊主め。』彼は、朝早く、挨拶もせず、立腹しきって立ち去ったが、その修道院に悪霊を送り込んであばれさせ、その霊が昼も夜も騒がしい音をたて、教会のなかでも修道士たちの房のなかでもあらゆるものをがたがた動かしたので、修道士たちは何をするにも落ち着かなかった。』⁽³⁵⁾

ここでガストは、ファウストがある修道院にポルターガイストを送り込んで修道士たちを悩ませた話を語っているが、この話の実録性を裏付けることのできる資料はない。むしろ、一五二七年ルクスハイムの修道院から逃げ出したひとりの修道士が、一五四八年バーゼルへやって来たことがわかっており⁽³⁶⁾、おそらく、ルクスハイムの修道院で起こった霊媒現象——こういうことばを使うことをお許しいただきたい——が何らかのきっかけで、本来それとは無縁のファウストに関連づけられたのであると推測される。ファウスト説話（二）と同じ内容の話がツインマーの年代記⁽³⁷⁾にも見出されるが、この、ツインマーの年代記の話も引用して、われわれはのちにファウスト説話（二）を、「ファウスト本とファウスト伝説におけるプロテスタンティズムのあらわれ」という観点から、ふたたび考察することになる。

二、魔物の馬

「犬」とならんで「馬」もファウスト文学にとって重要な動物である。ファウスト本第二十六章の冒頭には次のように書かれている。

「ファウストゥス博士は、十六年目に、旅または回国をしようと思い、そこで彼の霊メフォストーフィレスに、自分の要望するところへ案内し、連れていくよう命じた。そこで、メフォストーフィレスは馬に姿を変えた〔後略〕。」
（五八、傍点は論者による）（38）

ゲーテの『ファウスト』においても、メフィストーフェレスは、からだの一部に関して、馬のかたちをしている。このことは、たとえば、第一部、「魔女の厨」の場面における、メフィストーフェレスに対する魔女の次の台詞から知ることができる。

「あらまあ旦那、これはとんだご無礼をいたしました。

ちよいと馬の足が見えないもんですからね。」（二四八九—二四九〇行）

同じく第一部、「ワルプルギスの夜」において、老婆がメフィストーフェレスのことを、「馬の足もつ騎士様」（四一四〇行）と呼ぶ。また、第二部、第一幕における「燈火明るい数個の広間」では、メフィストーフェレスに足を踏まれた「鳶色の女」が次のように叫ぶ。

「あ痛、あ痛。ズキンズキンする。ひどかったわ、

馬の蹄で踏まれたみたい。」（六三三九—六三四〇行）

このように、ゲーテの『ファウスト』においても、悪魔メフィストーフェレスは馬のかたちをそなえているのであるが、なぜメフィストーフェレスが馬の脚をしているのかということに対する答えを、第一部、「ライプチヒ市のアウエルバッハの酒場」の場面に登場する、乱痴気騒ぎをしている学生のひとりジーベルがメフィストーフェレスに関

して言う次の台詞が与えてくれる。

「なんだこいつ跛じゃないか。」

(二一八四行)

悪魔はもともとは天にあって天使長であったが、不遜・傲慢のゆえに墜地獄の運命に定められ、この悪しき天使は天からおちたさい跛になった、つまり足が馬の脚のように奇形した、とする説がある⁽³⁹⁾。ゲーテがメフィストーフエレスに馬の脚を与えたことについても、アウグスチヌス以後広まったこの悪魔観によるところが大きいといえよう。他方、ファウスト本のメフォストーフイレスに関していえば、中世の民間信仰において、悪霊はしばしば馬の姿をして現われるとされており、メフォストーフイレスが馬に変身するのはこの俗信の影響であると見られる⁽⁴⁰⁾。

結局、ファウストの従僕としての悪魔は、十六世紀には、アグリッパ伝説の影響によって「犬」、中世の民間信仰の影響によって「馬」という二つの形態をとってあらわれることになったのである。ただ、この二つの形態が、どの説話においても、どの作品においても、つねに併存した状態で見出されるわけではない。ガストによって書きつけられたファウスト説話(一)のなかでは、ファウスト文学、否、ファウストに関して文字に書かれたものすべてにおける「魔物の犬」と「魔物の馬」の最初のあらわれとして、この二つの形態が共存していたが、メランヒトンの『語録』においては、「馬」は姿を消し、「二匹の犬」になってしまふ。ところが、ファウスト本では、「犬」が除外され、「馬」に、部分的にはあるが、場が与えられる。そして、ファウスト本からおよそ二世紀半ののち、ゲーテの『ファウスト』において、悪魔メフィストーフエレスがひとりで、「犬」と「馬」の二つのかたちをもって登場するのである。ただ、十六世紀のファウスト伝説およびファウスト本における、ファウストの従僕としての悪魔の二つの変身形態とゲーテの『ファウスト』におけるメフィストーフエレスの「尫犬」と「馬の脚」という形態との関係についての説明は、ヨーロッパにおける悪魔観とその歴史の複雑さに鑑みても、別途に究明を要する問題である。

「馬」が問題になったところで、話題がすこし飛躍するかもしれないが、ファウスト本第三十九章に見出される、馬の名まえに関する問題を扱うことにする。というのも、この問題を扱うことは、伝説生成のメカニズムを知ろうと有益であり、前出のことばを使えば、「誤解」⁽⁴¹⁾の恰好の例を示すことになるからである。そこでまず、ファウスト本第三十九章「ファウストゥス博士、博労をだます」^{(84)*}から引用する。

「彼「ファウストゥス博士」は一頭のすばらしいみごとな⁽⁴²⁾馬をつくりあげ、それに乗ってプアイフェリングと
いう町の大手にでかけると、買い手がたくさん集まり、とうとう彼はその馬を四十フロリンで売った「後略」。
*
(84)

ここで問題となるのは、「プアイフェリング」(Pfeifering)という語である。この語について、キェルシュナー編、ドイツ国民文学体系、第二十五巻におさめられた、ファウスト本のテキストに付された脚注には「不明」⁽⁴³⁾とあり、またローベルト・ペツチュも、彼が編纂した、ファウスト本のテキストの脚注において、「この名まえの町を、私は確認することができない」⁽⁴⁴⁾と述べている。ここで、私は、「プ、ア、イ、フ、エ、リ、ン、グ」は、町の名まえではなく、もともとは馬の名まえであった、という仮説を提出する。『ヨーハン・ファウストゥス博士の物語』は、そもそも、ひとりの作者の創作によって成立した物語ではなく、方々に散在していた種々の説話を集めてつくられた物語である。従って、私の仮説の意味するところは、ファウスト本よりも前の段階において、「プアイフェリング」は、ファウストが魔法でつくりあげた馬の名まえであったが、説話の伝承過程においてならんかの「誤解」が生じ、馬の名まえが町の名まえに摩替えられた、ということなのである。とにかく、この仮説を証明しなければならぬ。ただ、この仮説を系統的に証明しうるだけの十分な直接的証拠が今日ない以上、いくつかの状況証拠の積み重ねによる証明という方法がとられることになる。そして、この証明過程において、そもそもなぜこのような仮説に到達したのかという根本的な事柄も明らかになる。

〔仮説の証明〕

ファウスト本には、そこに書かれた物語が単なる虚構ではなく、実録にもとづいていることを主張することばがいくつも見出される——情況証拠一。最終章である第六十八章の最後の段落には、次のように書かれている。

「こうしてファウストゥス博士のすべての真実の物語と魔術についての話は終る「後略」。」(一二二)^{*}、傍点は論者による、以下同様)

また、表題紙には、『ヨーハン・ファウストゥス博士の物語』を「恐ろしき実例、忌わしき範例、誠実なる警告として、大部分彼「ファウストゥス」自身の書きのこしたものより集め、印刷に付した」(一一)、とある。しかも、傍点は朱で印刷されていた⁽⁴⁶⁾。

十六世紀にはまだ、ひとびとの脳裏に、実在したファウストに關する記憶が生きていた。ヴォルムスの医師フィリップ・ベガルディはその著作『健康の指標』(一五三九)⁽⁴⁶⁾のなかで次のように述べている。

「はつきりと名を知られた人目をひく男がなおまた見出される。私は彼の名を挙げてしまいたくないのだが、彼のほうは隠されていることも無名⁽⁴⁷⁾でいることも欲していない。それというのも、彼は、数年前まさに国中の諸領、侯国や王国を巡り歩き、自分の名を自ら誰にでも宣言した。〔中略〕自分がファウストゥスであり、ファウストゥスというのが自分の名であると自ら認めて、否定せず、同時にまた、『哲学者中の哲学者』と書いた。だが、自分は彼にだまされたといつて、いかに多くのひとびとが私に苦情を訴えたことか、そういうひとが実に多数いた。ところで、彼が約束したことは、テッサルスのそのように多かつた。同様に彼の名声も、テオフラストゥス⁽⁴⁸⁾のそのように、大きかつた。しかし、実際のおこないは、私の知るところでは、全くつまらぬ詐欺的なものであった。すなわち、彼はひとから金を巻き上げるか、(状況を正しく伝えるために言うが)躊躇せず、受け取るかし、そのあとそのひとのところから退散した、つまり彼は、今述べたように、多くのひとたちに一杯食わせて逃走したのだ。しかし、

今さらどうしようというのだ。過ぎたことはどうしようもない「後略」。(48)

また、ファウスト本の出版者ヨーハン・シュピースは、ファウスト本に付した献詞のなかで、「さて多年ドイツに、悪名高き魔術師、妖術師ヨーハン・ファウスト博士の奇異なる出来事についての、一般の大きな噂があり、いたるところでこのファウスト博士の物語を求める声が、宴席や集会において上がりました」(三)^{*}と述べている。結局、ベガルディヤシュピースのことだから、当時、ファウストによせる大きな関心、ファウストに関するさまざまなお噂——それらはしばしば悪評・非難・苦情であり、ときにまた驚嘆・感嘆でもある——のあったことがわかる。さらに、ルター⁽⁴⁹⁾やメランヒトンもファウストのことに言及していることを想起すれば、ファウストという人物が実在したという認識は、当時多くのひとびとによって共有されていた一般的認識であったといってもさほど過言ではあるまい。ファウスト本の著者は物語のなかに次のようなことを織り込んでいる。

「たとえば、今なおひとびとの記憶に生きているヨーハン・ファウスト博士のごとくに。」(九)^{*}

結局、ファウスト本の著者は、噂や憶測も含めて、読者が実在したファウストに関する知識をもっていること、換言すれば、読者によってファウストの歴史的事実が承認されていることを踏まえたくて、自分の提供する『ヨーハン・ファウスト博士の物語』が、実在したファウストの手記にもとづいて書かれた実録であると強調する——実在したファウストが手記や著書をのこしたという噂・報告もある——ことによつて⁽⁵⁰⁾、この物語が読者に及ぼす効果⁽⁵¹⁾を増大させるというやり方をとっているのである。六十八の章すべてが本当に事実にもとづくものであるかどうかということは別として、とにかく実録という体裁がとられているなかで、「プアイフェリング」などという架空の町の名が突如持ち出されるのは納得のゆかないことである。

そこで、ファウスト本第一章から第六十八章までにてでくる都市・まち・村の名まえとその名まえがでてくる章の番号を書き出すと、次のようになる⁽⁵²⁾。

都市・まち・村の名称	初期新高ドイツ語による原名	章の番号
アーヘン	Ach	26
アイスレーベン	Eigleben	28、56
アウグスブルク	Augsburg	9、26
アンハルト	Anhalt	44
インスブルク	Inbruck	33
ウィーン	Wien	26
ヴィテンベルク(53)	Wittenberg	1、2、25、26、32
ヴェニス	Venedig	55、58、60、67、68
ヴェルツブルク	Wirtzburg	37、41、45、53、54
ウルム	Vlm	26、44、54
エルフルト	Erdfurt	26
オーフェン	Ofen	26
カイロ	Alkair	26、27
クラカウ	Cracaw	26
ケルン	Cölln	26
ゴータ	Gotha	36

コンスタンチノープル(55)	Constantinopel	25
コンスタンツ	Consnitz	26
ザムッツ(56)	Sabatz	26
ザルツブルク	Salzburg	9
シュトラースブルク	Strasbourg	26
ジュネーブ	Genff	26
ツヴィカウ	Zwickaw	40
トリリア	Trier	26
ナポリ	Neapolis	26
ニュルンベルク	Nürnberg	9
バーゼル	Basel	26
パドア	Padua	26
パリ	Parib	26
ハルバーシュタット	Halberstatt	29
プайフェリング	Pfeiffering	39
プラハ	Prag	26
フランクフルト(57)	Franckfurt	9
ブラウンシュヴァイク	Braunschweig	50
フローレンス	Florentz	51

ベツレヘム	Bethlehem	26
マインツ	Meyntz	26
マクデブルク	Magdenburg	26
ミュンヘン	München	26、 37
シラノ	Meylandt	26
リヨン	Leon	26
リムリヒ ⁽⁵⁸⁾	Rimlich	67
リューベック	Lübeck	26
レーゲンスブルク	Regenspurg	26
ロート ⁽⁵⁹⁾	Rod	1
ローマ	Rom	26
ワイマル	Weimar	1

右の調査結果から、いくつかの重要な事実を指摘することができる。一つは、『ヨーハン・ファウストゥス博士の物語』の主たる舞台はヴィテンベルクであるのだが、このことが、右の表から数値的にも確認されることである。もう一つは、第二十六章に非常に多くの都市名がでていゝることである。この章は、ハルトマン・シェーデルの『世界年代記』(一四九三)⁽⁶⁰⁾を典拠としており⁽⁶¹⁾、この章では、当時のヨーロッパの主要な都市とそのありさまが紹介される。つまり、この章は、地誌的役割をしているのである。因に、地誌的性格を有しているのは第二十六章だけではなく、その前後の章、すなわち第二十五章(の一部)および第二十七章(の大半)でもある⁽⁶²⁾。ファウスト本が地誌的要素を有していることを、情況証拠二とする。

けれども、問題の仮説の証明のために、右の表から読み取るべきより重要な事柄は、ファウスト本にでてくる都市・まち・村の名称は、第三十九章の「プ、ア、イ、フ、ェ、リ、ン、グ」を除いては、すべて実在のものである、ということである——情況証拠三⁶³。四十七の都市・まち・村の名称のうち、四十六までが実在のものであるなかで、一つだけが架空のものであるのは不自然だと考えられる。

最後に、情況証拠四として、一五八八年チュービンゲン大学の学生たちによって韻文になおされた、ファウスト本の改作⁶⁴から、一節を引用する。

「ほんものと変わらない、

みごとなすばらしい、賢い馬を

彼はつくりあげた。

彼はその馬に乗り、ずっと駆足で、

大市へ行き、その馬を売った。

その馬を彼はプ、ア、イ、フ、ェ、リ、ン、グと名づけていた。⁶⁵

ここでは、はっきりと、「プ、ア、イ、フ、ェ、リ、ン、グ」は馬の名まえとして挙げられている。この一節は情況証拠というよりも、むしろ決定的な直接証拠であるように思われるかもしれない。けれども、この一節は、「プ、ア、イ、フ、ェ、リ、ン、グ」を町の名とする、一五八七年のファウスト本の記述に時間的に先行するものではなく、一五八七年のファウスト本よりも一年のちに成立した改作のうちにあるという理由から、情況証拠にとどまるのである。

以上、四つの情況証拠から、次のように考えることができよう。「プ、ア、イ、フ、ェ、リ、ン、グ」は本来、ファウストが魔法でつくった馬の名まえであったが、説話の伝承過程のどこかで「誤解」が生じ、「プ、ア、イ、フ、ェ、リ、ン、グ」は馬の名まえから町の名まえに摩替えられてしまった。この「誤解」がどの段階で生じたのか、原著者が種々の説話を集めて一つ

の物語にまとめたときか、あるいは、収集された素材のなかにすでにその「誤解」は含まれていたのか、それとも、一五八七年のファウスト本の著述・印刷の段階においてか⁽⁶⁶⁾、この点は不明である。けれども、とにかく、ファウスト本の著者も出版者も、この「誤解」に気付くことなく、原稿を印刷に付した。その結果、実録として書かれ、それに応じて、作中に出てくる地名も、一つを除いては、すべて実在のものであり、さらに地誌的要素をも含んでいるところの物語に、突如、架空のまちがあらわれるという奇妙な事態が生じたのである⁽⁶⁷⁾。

さて、ファウスト説話(一)では、ファウストが料理人に提供した、出所のわからない種々の珍しい鳥のこと、悪魔と思われる、ファウストの従僕たる犬がファウストのところに御馳走を運んできたことが語られているが、これと類似した内容をもつ次のようなくだりがファウスト本第九章に見出される。

「飲食物や貯蔵食は、ファウストウス博士にはあり余るほどであった。上等の葡萄酒が欲しいときにはいつも、彼の霊が、彼の望む酒蔵からそれをもってきた。一度彼が漏らしたところによると、彼は自分の領主である選帝侯、またバイエルン公、ザルツブルクの司教の酒蔵を大いに荒らした。こうして、彼は毎日調理された食べ物をとった。それから、窓を開けて、欲しい鳥の名を言うと、すぐその鳥が窓から飛び込んでくるという魔法の術をつかうことができた。同様に、彼の霊は周辺のすべての領主たちのところから、侯爵や伯爵の宮廷から、最上の料理を彼のところに持ってきた。すべて、まったく王侯らしい豪華なものだった。彼と彼の弟子はりっぱな服装をしていたが、その服地は、彼の霊が夜、ニュルンベルクやアウグスブルク、あるいはフランクフルトで買うか、盗むかしたものにながいがなかった。というのも、商人は夜たいい店にいないものだから。同様に、なめし屋や靴屋も被害を受けているにちがいない。」^{*}(二五)

ここで、ファウスト説話(一)とファウスト本とを比較してみると、ファウスト本のほうが、話が内容的にも量的

にも豊かになっていることがわかる。ファウスト本においては、ファウストと「彼の霊」の行為がより具体的に示され、場所もはっきりと示されている。ファウストのところにもってこられるものも、ファウスト説話（一）における「御馳走」に対して、ファウスト本では、「飲食物や貯蔵食」、「調理された食べ物」、「最上の料理」、「上等の葡萄酒」となり、さらに服や革製品まで加わる。つまり、話の中味がより具体化され、話が拡張されている。この二者の比較から、話を具象化して拡張することによる説話の形成の一端が窺われるが、われわれは次に、「拡張」および「誇張」による説話の形成のより顕著な例を、ファウストの死に関する記述・描写において見出すことになる。

三、ファウストの恐ろしい最後

そこで、ファウストの死に関する最古の発言、すなわち、ファウスト説話（一）に見出される、問題となることばを、ここであらためて引用する。

「哀れにも、彼は恐ろしい最後を遂げた。というのも、悪魔が彼を絞め殺したからだ。棺におさめられた彼のからだは、ひとびとが五たび反対側に曲げてみたが、いつも顔の上にあった。」⁽⁶⁸⁾

まず、注意すべきは、「というのも、悪魔が彼を絞め殺したからだ」という発言は、言い伝えられていくうちに、いわば伝説のなかで、生じたものではないということである。これは、むしろ、実在したファウストの死にすでに付随していた、十六世紀の真面目な評価である。われわれは、悪魔によるファウストの殺害という記述に直面するとき、十六世紀にはまだ悪魔がひとびとの意識のなかに生きていたことを想起しなければならない。さまざまな悪魔談義が横行していたが、それらは単に、迷信の産物として片付けられるものではない。悪魔の登場は、当時の真剣な思考がしばしば有している特徴である。ルターは真剣に、しばしば悪魔に関する発言をしたが、ファウストに関連するものとして、一五三〇年代の次の「卓上談話」を引用しておこう。

「晩餐のおりファウストゥスと呼ばれている魔術師のことがいわれたとき、マルティン博士は真剣に斯くの如く語られた。『悪魔は魔術師を私に対して用いることはありません。悪魔が私に害をなすことができたのなら、彼はずつとまゑに私に害をなしたはずです。彼はすでにたびたび私の首つ玉をとらえたことがあるのですが、しかし彼は私を、私の意のままにさせておかざるをえなかったのです。彼が如何なるやからであるか、私は十分彼を研究しました。彼は、しばしば私を、生きているのか、死んでしまったのか、もはやわからなくなるほど激しく攻め立てました。彼はまた私を絶望に陥れ、實際神があるのかどうかわからなくし、私はわれらの主なる神をことごとく拒んだのです。しかし、神の御言みことばが私を彼から護ってくれたのです。神が助け給う（ちょっとした言葉のあるひとをとおして語らせるか、さもなければその言葉を当事者がとらえるかなのですが）ほかに、何の助けも助言もないのです。神の御言がなければ、もうだめなのです。なぜなら、そのとき彼はひとびとに乗って、意のままに手綱をとることができるから」⁽⁶⁸⁾」

ツインマーの年代記には、ファウストの死について次のように書かれている。

「同人（ファウストゥス）は、生前多くの不可思議なこと（中略）をおこなったのち、最後にはブライスガウのシュタウフェン領内で、高齢にして、悪魔に殺された。」⁽⁷⁰⁾

また、もう一カ所、次のように書かれている。

「そのころファウストゥスはブライスガウの小さな町シュタウフェン、あるいはそこからほど遠からぬ所で死んだ。彼は、現在ドイツの諸邦で見出すことができるであろうどの魔術師よりも、生前驚嘆すべき魔術師であった。彼は多くの珍しいわざを方々でおこなったので、彼のことは多年、容易には忘れられないであろう。聞くところによると、彼は年をとって、悲惨な最後をとげたということである。さまざまな報告によると、多くのひとびとが、彼が生前もつばら自分の義兄だと言っていた悪魔が彼を殺したと考えた「後略」。」⁽⁷¹⁾

ツインマーの年代記とは、シュヴァーベンの領主フローベン・クリストフ・フォン・ツインメルン⁽²⁵⁾によって作成の発端が与えられ、ヨハネス・ミュラー⁽²⁶⁾によって書きつけられた、この領主の一家の歴史に関する記録であり、作成されたのは、一五六四年から六六年にかけてである⁽²⁷⁾。この年代記は、右に引用した二つの記述によって、実在したファウストの死についての説明、すなわちその場所・状況の説明および没年推定に有効な文献として、これまでしばしば重用されてきた。ただ、「聞くところによると」、「さまざまな報告によると」といった表現が示しているように、ツインマーの年代記の記述がしばしば風聞・噂によっていることは明らかである。そのため、記録としての真正という点に関して、この年代記には問題もあるが、上の二つの引用から考えられることは、実在したファウストが、ひとびとに、彼は悪魔に殺されたのだと判断させ、噂させるような、不自然で悲惨な最後をとげたということである。今日の研究では、一般に、実在したファウストは、化学の実験、おそらくは錬金術作業の過程で起こった爆発が原因で死亡したと考えられている⁽²⁸⁾。

ファウスト——実在したファウストのことだが——の生前の行状とその死にざまを多少とも知っていたひとであれば、教養あるひとといえども——当時の教養人の多くが聖職者であることを考えれば、むしろ、教養あるひとほど、と言うべきであるかもしれないが——、そのひとが、ファウストは悪魔に殺害されたという見方をしたとしても不思議ではないといえよう。

ルターは、一五三〇年代の「卓上談話」のなかで、さらにまた次のように語っている。

「ひとびとはあまたのことをファウストゥスについて語っていましたが、彼は悪魔を自分の義兄と呼び、私、マルティン・ルターが自分〔ファウストゥス〕に手を差し出していさえすれば、自分は彼をやっつけていただろうとはなしたそうです。しかし、私は彼に会おうとは思いませんでした。」⁽²⁹⁾

この発言のなかで、ルターという十六世紀のいわば大立て者がはっきりと、直接ファウストのことに言及している

ことによって、ファウストの実在が十六世紀のひとびとにとっては自明のことであったことがあらためて確認される。しかも、ツインマーの年代記の記述と同様に、ルターも、ファウストと悪魔との親密な関係に触れているのである。

悪魔によるファウストの殺害は、『ヨーハン・ファウストゥス博士の物語』においては、一つのクライマックスを形成する重要なモチーフとなっており、またファウスト伝説にとっても、それを大きく発展させることになった一つの強力な因子ではあるが、ファウストは悪魔に殺害されたという見方そのものは、いいたえられていくうちに生じたもの、いかなれば、後発的伝説的要素ではなく、実在したファウストの死に対して即時なされた判断・評価である。そこで、われわれが考察の目を向けなければならぬのは、ファウストの死にさまざまに関する描写が、個々の記者によってどのように異なっているか、時とともにどのように変化しているか、という点なのである。

十六世紀に出版された文献で、ファウストの死に言及しているものは、六つある。それらを著者名（または編者名）および初版発行年で示せば、次のとおりである。

- (一) ヨハネス・ガスト、一五四八⁽⁷⁷⁾
- (二) ヨハネス・マンリウス、一五六三⁽⁷⁸⁾
- (三) ヨハネス・ヴァイアー、一五六八⁽⁷⁹⁾
- (四) アンドレーアス・ホンドルフ、一五六八⁽⁸⁰⁾
- (五) ヴォルフガング・ビュトナー、一五七六⁽⁸¹⁾
- (六) アウグステイン・レルヒアイマー・フォン・シュタインフェルデン、一五八五⁽⁸²⁾

また、ツインマーの年代記は、出版されたのは十九世紀になってからであるが⁽⁸³⁾、作成されたのは、すでに述べたように、一五六四年から一五六六年にかけてであり、ファウストの死に関する記述を含む、十六世紀の重要な文献

として見のがすことができない。

これらのなかで、ヴァイアー、ホンドルフ、ビュトナーおよびレルヒアイマーはマンリウスに準拠している⁽⁸⁴⁾。その結果、ファウストの死に関する描写について、その推移の態様を特性をとらえて簡潔かつ明確に示すため、重要な点となる文献をピック・アップすれば、ガスト、マンリウス、ツインマーの年代記、そしてファウスト本の四つになる。

まず、伝説形成の初期に位置するファウスト説話(一)における、ファウストの死についてのガストの書き方と、実在したファウストの死からおよそ半世紀のちに成立したファウスト本における、ファウストの死の描き方とを比較する。そのために、ここで、ファウスト本第六十八章から当該の箇所を引用する。

「夜中の十二時から一時までの間、その家に向かって激しい大風が吹き、それはまるですべてを滅ぼすかのごとく、家の至る所を包み、家を引き倒そうとした。学生たちはもうだめだと思って、ベットからとび起き、お互いに慰め合いだしたが、部屋から出ようとはしなかった。宿の主人は自分の家から駆け出して、別の家にはいった。学生たちは、ファウストゥス博士がいた部屋の近くに寝ていたが、彼らはヒューヒューという音やシュッシュュツという身の毛のよだつ音を聞いた。まるで家じゅうが蛇・蝮、そのほかの害虫でいっぱいになっているようだった。この間、ファウストゥス博士の部屋の戸が開き、助けてくれ、人殺し、と彼は叫びはじめたが、それもやっと半分ほどの声で、まもなく彼の声はもはや聞こえなくなった。さて、夜が明けると、一晩じゅう眠らなかった学生たちは、ファウストゥス博士がいた部屋にはいつていつたが、しかしもはやファウストゥスの姿は見えず、血しぶきだらけの部屋しかなかった。脳みそが壁にこびりついていていつたが、そういうのも、悪魔が彼を一方の壁から他方の壁にたたきつけたからだ。彼の眼球と数本の歯もそこにあった。身の毛もよだつ、恐ろしい光景だった。そのとき学生たちは彼をいたみ、泣きはじめ、至る所彼をさがし回った。ついに彼らは、彼のからだだが外の堆肥のそばに横たわっているのを見つけたが、それ

は身の毛のよだつ様になっていた。というのも、彼の頭と手足すべてがブラブラになって垂れていたからである。」
*(1111)

ガストとファウスト本、両者をただ量的に比較しても、ガストが二十一語で済ませているのに対して、ファウスト本では、二三八語となり、語数はガストのおよそ十一倍に膨れあがっていることがわかる(どちらもドイツ語原文によつてかぞえた語数)。内容に関しては、次のことが指摘されよう。ガストのファウスト説話(一)においては、ファウストの死体の奇異で恐ろしいさまが簡潔に述べられているが、そのくざりとその前の部分との間に脈絡の欠ける感がある。ファウストのところに御馳走を運んできたのが、悪魔であろうと推測される犬であること、ファウストを絞め殺したのが悪魔であることによつてなんとか脈絡が保たれている。これに対して、ファウスト本では、ファウストの死骸の状態が描写されているだけでなく、ファウストをいたましい死に至らしめた恐ろしい出来事、その出来事が起こった夜の状況までもが物語られている。さらに、宿の主人や学生たちの行動・様子についての描写が加わることによつて、上に引用した箇所全体が物語のなかにしっかりと組み込まれている。つまり、ここでは、伝説形成の進行にとまなう、説話の肉付けということだけではなく、また、文学化がおこなわれているのである。そしてそれによつて、「ファウストの恐ろしい最後」という伝承されてきた事象の、文学的モチーフへの転化・昇華がはじまっているのである。

宿の主人と学生たちに関する部分は別にして、ファウスト本第六十八章の上に引用した箇所、とくに大風が吹いた夜の家の状況とファウストの死にさまに関する描写において用いられている手法は、主として、「誇張」による表現法である。だが、まず、宿の主人と学生たちに関する部分から、述べていくことにする。

われわれはこれまで、ファウストの死に関する発言として、ガストの『食卓談話』第二巻、ツインマーの年代記およびファウスト本から当該の箇所を引用してきたが、それらを見た限りにおいては、「宿の主人」と「学生たち」は、

ファウスト本に突如現われるもの、いわばファウスト本の著者の創作による産物であるように思われるかもしれない。しかし、それはすでにマンリウスによってつたえられていたものであることが、『語録』に見出される次の記述から判明する。

「二、三年前そのヨハネス・ファウストゥスが、彼の最期の前日、全く悲しみにくられて、ヴェルテンベルク地方のある村にいたのです。宿の主人が彼に、(いつもは全く恥知らずな奴で、きわめて邪悪な生活をし、ひどくみだらなふるまいのせいで幾度か命を失いそうになったのに) いつになく悲しんでいるのはどういうわけなのか、と尋ねると、彼は主人にこう言ったのです。『今夜あなたが何を聞こうとも、驚かないでください。』夜中、家のなかで、ひどい物音がしました。翌朝ファウストゥスは起きてこようともしませんでした。それで、もうすぐおひるになろうとするころ、宿の主人は数人の男を連れて彼の部屋に行き、そして、彼が休んでいる寝室にはいったのですが、そこで彼らは、彼がベットの傍に倒れて死んでいるのを見つけたのです。しかも、悪魔が彼のからだをねじ曲げたので、彼の顔は背中の上にあったのです。」(文中の丸括弧は原文による)⁽⁸⁵⁾

マンリウスが編纂した、メランヒトンの『語録』においてすでに、「宿の主人」の登場が確認される。また、ファウスト本における「学生たち」の原型ともいうべきものが、『語録』に登場する「数人の男」に見出される。つまり、ファウスト本における「宿の主人」にも、「学生たち」にも、そのもとになるものがすでにメランヒトンの『語録』によって提供されていたことがわかる。

さて、ガストのファウスト説話(一)、ツインマーの年代記およびファウスト本におけるファウストの死に関する記述・描写に、上に引用した『語録』の記述を加えることによって、ファウストの死についてつたえることばの変化してゆくさまがより明らかにになる。ファウスト説話(一) およびツインマーの年代記では、ファウストの死にざまは、簡単に、ほとんど骨子だけが示されているが、『語録』になると、かなり肉付けがなされ、ファウスト本に至っ

ては、記述はさらに拡張され、具象化する。ここでとくに、『語録』とファウスト本との間にある内容の類似が目につく。ファウスト本における、時・場所の具体的設定にも、「宿の主人」と「学生たち」の場合と同様に、その前段階のあったことが、『語録』のことばからわかる。つまり、ファウスト本における「夜中の十二時から一時までの間」、およびファウスト本第六十七章に見出される「ヴィテンベルクから半マイルほど離れたリムリヒの村」(一一七)は、それぞれ、『語録』における「夜中」、「ヴェルテンベルク地方のある村」に対応する。もっとも、地理的なずれがあるが、これについては、のちに述べる。

ファウスト本における叙述・描写と『語録』の記述との比較・検討から、ファウスト本においては、『語録』におけるよりもさらに文・内容が拡張され、表現もより具象的になっていることがわかる。この拡張および具象化に関して、とくに目につくのは、「夜中、家のなかで、ひどい物音がしました」と、『語録』ではただ一文で済まされているところの著しい増幅である。そこではとくに、擬音語や比喩的表現が目につく。そして、「学生たちは〔中略〕ヒューヒューという音やシュッシュュツという身の毛のよだつ音を聞いた。まるで家じゅうが蛇・蟻、そのほかの害虫でいっぱいになっているようだった」という部分は、ヴォルフガング・カイザーの次の発言を思い起こさせる。

「グロテスクなものとして特別扱いはされている動物といえ、梟、蛙、蜘蛛など——夜行性動物と爬行獣類である。人間には近づきたい他の秩序に生きているからだ。さらに、すべての有害小動物 *Ungeziefer* がグロテスクなものにふさわしい。一部は確かに同じ理由によるが、加うるにその起源がはつきりしないからでもある。しかし、もう忘られているにもかかわらず、あたかもそのことばの根源的意味がまだ生きているかのようである。 *zebar* (66) は古高ドイツ語で犠牲の動物を意味する。それゆえ有害小動物は、不潔で犠牲に適しないすべての動物を意味するわけである。それは神のものではなく、悪魔のものである。」(67)

こう述べたあと、カイザーは、ゲーテの『ファウスト 第二部』第二幕第一場における「昆虫の合唱」(六五九二—

六六〇(三行)を引用して、メフィストーフェレスと有害小動物たちとの主従関係に触れているのであるが、われわれは、カイザーのこの発言を、ファウスト本の右の部分に対しても適用することができよう。

ファウストがいた部屋と彼の死骸に関する描写、すなわち「身の毛もよだつ、恐ろしい光景」についていえば、ファウスト本では、拡張と具象化がさらに進行しており、ここにおいても、「血しぶきだらけの部屋」、「脳みそが壁にこびりついていた」、肉体から分離した「眼球と数本の歯」など、グロテスクの表現が濃厚である。『語録』における「彼らは、彼がベットの傍に倒れて死んでいるのを見つけた」は、ファウスト本では、「彼らは、彼のからだだが外の堆肥のそばに横たわっているのを見つけた」となる。

叙述の拡張ということとの関連でさらにいえば、『語録』における「今夜あなたが何を聞こうとも、驚かないでください」というファウストのことばは、ファウスト本では次のようになる。

「さて、最後に私の親しきお願いは、諸君がベットに行き、安らかに眠り、たとえ家のなかで騒がしい物音や大騒動を聞いても、何も気にせず、驚かないことです。諸君には何の危害も起こりません。またベットから起き上がらないでください。そして私の肉体が死んでいるのを見出したら、地に埋めさせてください。というのは、私は悪しき、また善きキリスト教徒として死ぬからです。善きキリスト教徒というのは、私が心から後悔し、心のなかでは、私の魂が救われたいと思って、つねに恩寵を乞うているからであり、悪しきキリスト教徒と言うのは、私は、悪魔が肉体を得ようとしていることを知り、私がよるこんで彼にそれを任せようと思うからです。しかし、彼は私の魂には手出しをしないのです。そこでお願ひですが、ベットに行ってください。あなたがたによい夜を望みます。しかし私は、忌まわしい、悪しき、恐ろしき夜です。」(一一九、第六十八章の第二段落)

ここにおける著しい叙述の拡張は、ファウストの死の場面における、グロテスクの表現を多く用いた、誇張による拡張とは異なっている。ここでは、グロテスクの表現によってではなく、宗教性を帯びた、ファウストのことばによ

って叙述が拡張されている。このすぐまえの部分には、同じくファウストの一連の発言として、「私の恐ろしい最後は、諸君の生涯、鑑みと警告として下さい。諸君が神を眼前におき、神が諸君を悪魔の偽りと悪だくみから守り、誘惑に導かれぬようにし、神に従い、神にそむいた劫罰を受けたこの私のように神から離れぬように願いなさい。私は洗礼、キリストの秘蹟、神そのもの、すべての天の軍勢、そして人間、一人といえども失われることを欲しない神を軽蔑し、拒否したのです。諸君はまた、私が出会ったような悪い仲間誘惑されないようにしなさい。精出して教会に詣で、つねに悪魔と戦って勝ち、キリストと敬虔な行状を信じなさい」(一一九)とあり、第六十八章の第二段落におけるファウストの発言が、『ヨーハン・ファウストゥス博士の物語』に課された宗教的目的⁽⁸⁸⁾、すなわち、ファウストと同類のやから、魔術その他教会と聖書が禁じている行為・事柄に興味をいだく者に対する訓戒・警告と密に連関していることがわかる。つまり、第六十八章の第二段落において、物語の著者が、著しい叙述の拡張をなしたことの裏には、宗教的動機があるといえよう。もちろん、そこには、著者の物語製作への志向もあろうが、このいわば文学的志向は、すでにファウスト本の表題紙および二つの序においても明言されているように⁽⁸⁸⁾、上に示した宗教的目的と強く結び付いているから、物語製作という点から見ても、その根底には、宗教的思考とその判断の基本としての宗教的イイズムがあるといえよう。この宗教的イイズムがプロテスタンティズムであることは、すでに指摘した、メランヒトンの『語録』との著しい内容上の類似——今日、『語録』がファウスト本の典拠の一つであること、またルターの『卓上談話』も典拠であることがわかっている⁽⁸⁹⁾——からある程度推察できるかもしれないが、このことについてはのちに詳述する。

ところで、『ヨーハン・ファウストゥス博士の物語』を「創作」という面から見れば、物語の著者による純然たる創作はほとんどないといつてよい。このことは、これまでにおこなった、「魔物の犬」、「魔物の馬」および「ファウストの恐ろしい最後」に関する考察からも理解されよう。すなわち、これらはいずれもファウスト本にあらわれる重

要な話の要素であるが、それらはすでに、ガスト、マンリウス、あるいはヨハネス・ミュラーによって書きとめられ、つたえられてきたものであった。さらにいえば、ファウスト本の六十八の章にはすべて典拠のあることが、今日までの研究によって解明されている⁽⁹⁰⁾。もっとも、中世から近世初期までの、文字にあらわされた作品の大部分が、典拠をもって著述するといういわば中世的方法によって産み出されていることを考えれば⁽⁹¹⁾、ファウスト本が典拠をもっていることも当然のことといえよう。

それでは、『ヨーハン・ファウスト博士の物語』は借り物の文学かというところ、決してそうではない。たとえば、ファウストの死の場面にあらわれる人物——『語録』における「数人の男」——を「学生たち」と限定し、先行するいくつかの章にもファウストと学生たちが登場する話を組み込むことによって⁽⁹²⁾、物語をより具体的で変化のあるものにしながらかつ物語の内的整合をはかっているところには、確かに、物語の著者の創作的行為がある。また、叙述を拡張するという行為、それによって生まれた語や文、表現は著者のものである。ファウストが死亡した場所に関して、『語録』とファウスト本との間に大きなずれのあることにすでに言及したが、これは一つには、『ヨーハン・ファウスト博士の物語』をヴィテンベルクを中心に展開させようとする、著者の意図から生じた場所の移しかえのためであり、ここにも著者の創作的行為があると見ることができよう。因に、マンリウスによって編纂されたメラnhitonの『語録』における「ヴェルテンベルク地方のある村」は、マンリウスもしくはメラnhitonが、実在したファウスト⁽⁹³⁾とこれとは別人の「ヨハネス・ファウストゥス」とを取り違えたことの結果であるように考えられ⁽⁹⁴⁾、『語録』におけるこの「誤解」に、問題の地理的ずれを生ぜしめたもう一つの原因がもとめられる。ついでにいえば、実在したファウストが死亡した場所としては、ツィンマーの年代記に見出される「シユタウフェン」が今日もっとも支持されている。

けれども、上に挙げた創作的行為以上に注目すべき、ファウスト本における著者の行為は、物語の素材となった、

ファウストに関するいくつかの説話に内包されていたプロテスタンティズム思想の顕在化による、物語の宗教的性格の強化と作中へのプロテスタンティズム思想のあらたな投入であり、ここに、種々の説話から一つの物語を形成する際に著者がおこなったもつとも大きな行為がある。そこで、これから、ファウスト本とプロテスタンティズムとの関係、ガストの著作『食卓談話』第二巻に見出される二つのファウスト説話、マンリウス編纂のメランヒトンの『語録』におさめられたファウストに関する発言およびツインマーの年代記に書かれたファウストに関する報告、これらとプロテスタンティズムとの関係、また、宗教的側面から見た場合のこれらとファウスト本との関係にも言及しながら、考察する。

四、ファウスト伝説とファウスト本におけるプロテスタンティズムのあらわれ

ファウスト本、すなわち『ヨーハン・ファウストウス博士の物語』が宗教性を有していることは、すでにすこし述べたが、十六世紀のファウストに関する説話と宗教との関係は、ファウスト本において突如成立したものではない。ファウスト本よりも時間的に前の段階にあるメランヒトンの『語録』に見出されるファウストに関する発言、いやそれどころか、ファウスト伝説の生成の初期に位置する、ガストの『食卓談話』第二巻におさめられた二つのファウスト説話にもすでに宗教性のあらわれが発見されるのである。「ファウストの恐ろしい最後」についての考察のなかで触れた、悪魔によるファウストの殺害という見方からも、これらの文献——ファウスト本も含めて——の叙述が宗教性と無縁でないことが理解されよう。問題は、その宗教性がどの宗教からきているものであるのか、キリスト教からであるならば、どの宗派に属するものであるのか、ということであり、論述の順序としては、この問題からはじめていこう。

『語録』についていえば、この書は、メランヒトンの弟子であったヨハネス・マンリウスが、師の語ったことばを

まとめたものであることから、その宗派的所屬は明白である。記述内容からも、たとえば、「敬虔なるヨハネス大公が彼（ファウストゥス）を捕えるよう命じられると」（傍点は論者による）⁽⁹⁶⁾ということばから、これを語っている者の宗派上の立場が読み取られよう。また、『食卓談話』第二巻に見出される二つのファウスト説話についても、その著者ガストはプロテスタント教会の牧師であったことから、そこに見出される宗教性が、どの宗教、どの宗派のものであるかは明白である。ファウスト本についても、著者は不詳であるが、出版者ヨーハン・シュピースはプロテスタント教会の熱心な信者であった⁽⁹⁷⁾。けれども、若干なりとも文献の記述をもとにどの宗派に属するものかを指摘した『語録』の場合は別として、著者や出版者の宗派を示すことだけによって、宗派的所屬の問題を処理したのでは、それは、ファウスト伝説の生成・発展過程におけるプロテスタンティッシュな要素の伝承・蓄積の様子を説明することにはほとんど貢献しないのである。それぞれの文献の内容そのものから、そこにあるプロテスタンティズムが指摘されねばならない。そして、この指摘およびそれにもとづく考察によって、「魔物の犬」のところですでに触れていた問題、すなわち、ファウスト本において、何故メフォストーフィレスはもはや犬の姿をとらず、修道士に変身するのか、が説明される。

プロテスタンティズムの中心思想ないし特性として次の三つが挙げられる。すなわち、聖書本位主義⁽⁹⁸⁾、「ひとと信仰によってのみ義とされる」とする教義⁽⁹⁹⁾およびカトリック攻撃（これを便宜的に、反カトリック主義と呼ぶことにする）⁽¹⁰⁰⁾である。これら三つは、ファウスト本において、きわめて明確にあらわれている。ファウスト本第六十七章に、「悪魔はあなたに鋼のような肉体と魂を与え、劫罰を受けた他のもののように苦しませないと約束したではないか。こんな、もっと多くの慰めを霊は彼（ファウストゥス博士）に与えたが、それは偽りであり、聖書に反するものだった」⁽¹⁰¹⁾（二一七、傍点は論者による）と書かれているが、ここには聖書本位主義のあらわれがある。また、物語の処々にちりばめられた聖書のことばも、聖書本位主義の反映と見られよう⁽¹⁰²⁾。信義論についても、ファウス

ト本第五十二章「ファウストゥス博士に神にそむいた生活を思いとどまらせ、回心させようとしたある老人と、またそのことでその老人がどのような忘恩を受けたかの話」(一〇〇)^{*}において扱われており、よきおこないと懺悔によって魂の救済をもとめさせるカトリックの贖罪論⁽¹⁰⁾の無効であることが示されている。しかも、ファウストに対する老人の訓戒は、魔術師シモン(使徒行伝第八章)等の例をひき、エゼキエル書等のことばを用いてファウストに回心を促す、すなわち、聖書に例をひき、聖書のことばによって訓戒するというかたちでおこなわれており、ここにも聖書本位主義の一つのあらわれがある⁽¹¹⁾。

反カトリック主義に関して、最初に提示したのは、ファウスト本第二十六章、ファウストがローマで教皇の宮殿に侵入したくだりである。

「彼〔ファウストゥス博士〕はまた目に見えない姿で教皇の宮殿の前に行ったが、彼はたくさんの召使いや廷臣がいるのを見、またどんな御馳走が教皇の食卓に出されているか見たが、あり余るほどだったので、ファウストゥス博士は自分の霊に向かってこう言った。ちえっ、どうして悪魔は俺を教皇にしなかったんだ、と。ファウストゥス博士はまた、そこではみんなが自分と同じであるのを見た。すなわち、傲り・高ぶり・高慢・不遜・馬食・鯨飲・姦淫・姦通、教皇とその虫けらたちの、神にそむくありとあらゆる所業を見た。そこで、彼はそれからさらにこう言った。俺は、自分が悪魔の豚、雌豚だと思っていたが、しかし悪魔は俺をもっと肥やさなければなるまい。このローマの豚どもは肥えていて、みんな煮たり焼いたりするのにいい頃合だ。」(六〇)^{*}

ここでは、カトリック教会の長たる教皇、また「廷臣」たとえば枢機卿らがやり玉にあげられており、ファウスト本の反カトリック主義的性格が、このくだりには、きわめて明確にあらわれている。

ところで、このような反カトリック的な態度はファウスト本に突然あらわれるものではない。われわれは、ガストによって書かれたファウスト説話(二)をもういちど注意して読み返してみれば⁽¹²⁾、すでにそこにおいて早くも、

反カトリックの精神が持ち込まれていたことがわかる。すなわち、ファウストが修道院に悪霊を送り込んで、修道士たちを悩ませた理由は、修道士の客あしらいの悪さに求められる。悪霊を送り込んだファウストはもちろんのこと、修道士も悪い、否、修道士のほうが悪い、とすら読める。つまり、修道士たちが被った悪しき結果は、「とても裕福な」修道院であり、「おいしい葡萄酒」をもっているにもかかわらず、客に「水っぽくておいしくない並みの葡萄酒」をだしたことのいわば因果応報として語られており、これによってそこに一つの教訓談ができあがっていると見ることもできる。そして、そのような悪しき報いを受くべき存在として、「修道士」と「修道院」が選ばれているのである。修道士は、ファウストから非礼の報いを受けることによって、ファウスト以下の存在にすらなっている。この話を、ツインマーの年代記は次のようにつたえている。

「ヴァシヒーン(註)のルクスハイム(註)の修道士たちに対して彼〔ファウストゥス〕は幽霊を修道院のなかに押し込めたが、彼らは何年もその霊からはなれることができず悩まされたのだった。しかし、彼らがファウストゥスにかつて宿をかそうとしなかったことのゆえに、彼は修道士たちのところにその厄介者をつかわしたのである〔後略〕。」(16)

ツインマーの年代記においても、修道士たちが悪霊に悩まされることになったのは、「宿をかそうとしなかったこと」と、つまりは彼らの不親切にその原因がもとめられており、また、ファウストが送り込んだ悪霊をはらうことのできない、無力な修道士の姿が示されている。

修道士に対するこの扱い、すなわち、修道士をファウスト以下の存在とする扱いは、ファウスト本においては、より明確で徹底したものとなる。第二章、第五章、第八章および第九章の各章で、悪魔メフォストーフィレスが、ファウストの前にあらわれるときにはいつも、修道士の姿をしていることが読者に告げられる。それぞれの章から当該の箇所を引用する。

第二章「やがて悪魔である霊は、灰色の修道士の姿に変わり」(一五)*

第五章「靈に彼（ファウストゥス博士）はこう命じた。自分がおまえを呼び出すたびに、フランシスコ会修道士の姿をし、鈴をもって現われるようにと」（一九—二〇）

第八章「それから靈メフォストーフィレスはファウストゥス博士の部屋に、修道士のすがたかたちをしてはいってきた。」（二四）*

第九章「彼（ファウストゥス博士）の悪しき靈メフォストーフィレスは、いつも修道士の姿をして彼の前をうろついた」（二四—二五）

第二章ですでに、「灰色の修道士」という表現によって、その修道士の宗派が暗示されているが、第五章ではっきりと、「フランシスコ会修道士の姿をし」と書かれ、宗派が名指しされている。

さらに、第八章と第六十五章に、悪魔と修道士が等値のものとして評価されていることを示す文・表現が見出される。次に、これを引用する。

第八章（悪魔がファウストの前に現われるときに発した叫び声・わめき声に関して）

「まるで修道士たちが歌っているようだった」（二二）*

第六十五章「神は支配主であり、悪魔は修道院長か平の修道士にすぎない」（一一五）*

これらに加えて、すぐのちに引用する第十章の記述に見出される「ファウストゥス博士の修道士」（二六）——悪魔メフォストーフィレスのことをいったもの——という表現も、修道士と悪魔とがファウスト本においていわば同一視されていることを示すものである。

ファウストは悪しき人間であるけれども、彼にはすくなくとも回心のチャンスだけは与えられる。これに対して、修道士とはいえば、メフォストーフィレスに修道士の姿をさせることによって、つまるところ修道士イコール悪魔、という評価がくだされているのである。

ファウスト本のなかで非難・攻撃的とされている、カトリックの聖職者は、平の修道士ばかりではない。第十章では、「修道士」に加えて、「修道女」(106)、すでに見たように、第六十五章においては「修道院長」、第二十六章では、枢機卿やその他の教会人たち、さらに、カトリック教会のヒエラルヒーの頂点に立つローマ教皇にまで非難の矛先が向けられている。ここで見のがしてならないのは、「俺は、自分が悪魔の豚、雌豚だと思っていたが、しかし悪魔は俺をもっと肥やさなければなるまい。このローマの豚どもは肥えていて、みんな煮たり焼いたりするのいい頃合だ」というファウストのことばのなかに、カトリックの聖職者をファウスト以上に悪しとする、上に指摘した反カトリック的評価が、非常に明確なかたちで、あらためて確認される点である。「ローマの豚ども」、すなわち教皇とそ一派の者たちに比べれば、ファウストも悪徳においてまだまだ十分には肥えていない、悪魔がもっと肥やさなければならぬところの存在だというのである。

ところで、第十章には、次のように書かれている。

「修道士や修道女の流儀は結婚しないことであり、むしろ結婚を禁じているのだから、ファウストゥス博士の修道士(メフォストーフィレス)も彼をつねにそれから遠ざけた。」(二六)*

さらに、第十章、右の引用箇所に行先する部分に、「神がととのえさだめたもうた結婚」(二六)* という表現が見出されることも付け加えておく。つまり、第十章では、独身生活を義務づける、カトリックの掟に矛先が向けられているのである。第五十二章で、カトリックの贖罪論の無効性が暗示され、ひとが神から義とされるのは何によってあるかという問題が提起されていることを、これと併せ考えると、ファウスト本におけるカトリック攻撃は、深く教義の面にまで及んでいることがわかる。このように、ガストのファウスト説話においてはまだ萌芽の段階にあった反カトリック主義が、ファウスト本に至っては、徹底され、物語のなかに巧みに織り込まれているのである。

五、民衆本『ヨーハン・ファウスト博士の物語』において、何故メフォストーリーフィレスは犬に変身しないのかさて、これまで述べたことを振り返りながら、それもすこし遠目に鳥観しながら、これから、最後の「見出し」として掲げた論題に向かおう。なお、この論題は、もうすこし論点をしばったかたちで表現すれば、「ファウスト本においては、何故ファウストの従僕たる悪魔の変身形態として、犬ではなく、修道士が選ばれたのか」となる。

われわれが今日「昔話」と呼ぶもの、あるいはすこしあらたまつて「説話」といったりするものは、その話が生まれた時代のひとびとには、今日われわれがその話を読んだり、聞いたりするとき受けるような、迷信的、空想的あるいは幻想的という感をあまり与えなかったのではないだろうか。ひとくちに「説話」といっても、それは、神話・童話・伝説、あるいは民話などと呼び分けられたりし、しかもそれぞれがさらに細かく分類されたりする。そのなかで、一般に「伝説」と呼ばれているものは、しばしば史的事実という核をもっており、今日、われわれには荒唐無稽と思われる話でも、その伝説が生起した時代のひとびとにとっては、信じられる話、現実の話であった。ファウスト伝説の場合にも、ゲオルク・ファウストゥスというモデルともいふべき人物が実在したのであり(註)、われわれが「ファウスト伝説」といっている話も、十六世紀のひとびとにとっては、「ファウスト実話」となりうるものであった。

今日、多くのひとは、誰かが悪魔に殺害されたという話を耳にすれば、その話をしたひと、またその話そのものを、迷信的だ、非科学的だ、あるいは、神がかっている、と感ずるであろう。ところが、十六世紀のドイツにおいて、むしろ、多くのひとが、悪魔によるファウストの殺害という話を信じた、すくなくとも、この話をありえないこととして否定しはしなかったのである。このことは、ルターという、十六世紀ドイツの一つの時代精神とその運動となった、世界史上にはつきりと名をとどめる人物が、ファウストのことに触れながら、真剣に悪魔に関する論議をおこなっていることによっても裏付けられるし、ファウストに関する十六世紀の真面目な記録からも明らかである。

ヨーハン・ガストはプロテスタント教会の牧師、メランヒトンも聖職者、しかもヴァイテンベルク大学教授であり、ふたりとも、いわば、その時代のインテリである。ツインマーの年代記にしても、領主一家の歴史に関する真面目な記録である。つまり、ファウストが悪魔に殺されたということを、その時代の知識層も実際にあったこととしてうけとめていたのである。

さて、ファウストの従僕としての「魔物の犬」は、アグリッパ伝説によってすでにその下地がこしらえられている。「魔物の馬」は、中世の民間信仰のなかではぐくまれた悪魔観、いわば一つの伝統に立脚したものである。それゆえ、十六世紀の、ガストのファウスト説話の読者は、同じ話を予備知識なしに読む今日の読者が往々感ずるであろう、お伽噺のようだ、とか、空想的だ、という印象はあまり受けなかったであろう。むしろ、十六世紀のひとびとはその話をかなり真面目に、また興味をもって読んでいたにちがいない。このことは、すでに引用した、ヨーハン・シユピースのことばやフィーリップ・ベガルデイの記録からも窺われる。

けれども、十六世紀も後半になると、「魔物の犬」や「魔物の馬」が、ひとびとのあいだで得ていた信憑性に影がさしてきた。すでに一五三〇年、コペルニクスは地動説をとまえ、天動説すなわち地球中心説を否定した。ルターは、宗教改革運動によって、カトリック教会という旧体制に対して果敢に反抗した。新大陸・新航路の発見はすでに前世紀末からなされていた。こうして、ヨーロッパ世界の中世の枠は大きく打ち破られつつあった。時代はまさに中世から近世への過渡期であった。こうした世の中の動き、革新の波がひとびとのものの考え方にまったく影響を及ぼさなかったはずはない。すくなくとも、文字が読めるくらいの一ひとびとに関しては、悪魔が犬の姿をしてファウストのところへ御馳走を運び、さらにその犬が哲学的および自然科学的事柄について教授するということは信じられないことになりつつあった。読者よりもさらに、著者が「魔物の犬」に対して疑念をもち、「犬」に換えて、「修道士」という知識層に属する人間を、メフォスターフィレスの変身形態として選んだのである、とひとまず結論する。

ファウストの他の従僕にも目を向けておこう。ガストのファウスト説話(一)においても、メランヒトンの『語録』においても、ファウストの従僕の数は一匹の犬と一頭の馬であるのに対して、後者においては「二匹の犬」となっているという違いがあるとはいふものの、これらの従僕がいずれも動物である点は同じである。ところが、ファウスト本においては、従僕の数が変わらないが、もうひとりの従僕は、ヴァーゲナー(Wagner)と呼ばれる書生、つまり人間であり、もはや犬でも馬でもない。動物からひとへという、ファウストの従僕の変身形態の変化のなかに、中世的思考から近代の主知的思考への交替の一つのあらわれがあるといえ、それは、あまりにも図式的な発言であり、言過ぎであろうが、ファウスト本におけるファウストの従僕に与えられた、ひとという形態から、ファウスト本よりも前の段階にあるファウストに関する説話がそのなかで生成されていたところの思考世界から一歩踏み出したもの、を見て取ることはできよう。

これまで述べたことによつて、「見出し」に掲げた論題に対する答えが、半分は出されたことになる。すでに言及したように、この論題は、言外にさらに、「それではなぜメフォストローフィレスは修道士に変身するのか、メフォストローフィレスの変身形態として修道士が選ばれたことの特別な理由があるのか」という他の半分の問題をはらんでいる。しかしながら、すでに考察した、ファウスト本の示す反カトリック主義的態度を想起すれば、この問題に対する答えはおのずと出てこよう。

ファウスト本のなかでは、カトリックへの攻撃がなされていたが、同時にまた、悪魔に対して警戒することが教えられている。『ヨーハン・ファウスト博士の物語』は、ペテロ前書第五章のことば、「慎みて目を覚しをれ、汝らの仇なる悪魔、ほゆる獅子のごとく歴廻りて吞むべきものを尋ぬ。なんぢら信仰を堅うして彼を禦げ」(一二二)(註)で締めくくられている。誰かを食らおうといつも身構えている獅子のような悪魔、それがメフォストローフィレスであり、その悪魔に呑み込まれた人間がファウストである。十六世紀における対旧教の争いのなかで新教側は旧教徒を悪

魔呼ばわりして攻撃した——逆のこともいえる——が、メフォストーフィレスに修道士の姿をさせてファウストの前に現われさせることによって、悪魔に対する警告とカトリックに対する攻撃とが連動し、身近にいる修道士も警戒すべき存在、すなわち悪魔であるということ、修道士と悪魔との相即性が示されるのである。ここに、メフォストーフィレスがカトリック教会の成員であることの必要と意味が存するのである。そして、教皇や枢機卿、あるいは大司教よりも、ファウスト本が与えているところの平の修道士こそが、メフォストーフィレスの変身形態としては最適である。なぜなら、高位聖職者の姿形をメフォストーフィレスの平生の変身形態としたのでは、読者に疎遠の感を、ややもすれば現実から遊離しているという印象を与えかねないからであり、また、油断すればすぐにも襲ってくる悪魔、身近にいる悪魔に対する警戒を促すということからしても、平の修道士という形態が最も合目的なのである。こうして、ファウスト本において、メフォストーフィレスに修道士という変身形態が与えられていることの裏には、カトリック攻撃を目ざす宗教的意図があった、と説明できるのである。

〔追記〕 十六世紀の文献からの引用のなかでは「ファウストゥス」、論述のなかでは「ファウスト」と記したが、これは、次の事情による。

「ファウスト」という名まえ(姓)は実名であるとする説と仮名であるとする説とがある。Faust が実在したファウストの実名であり、その名がラテン語で書かれた文献にあらわれるので、ラテン語化のための語尾 *-us* が付されたとする説(実名説)、また、実在したファウストは「ファウスト」ではなく、「ファウストゥス」と名乗っていたが、それは実名ではなく、「幸運な、さい先のよい」という意味のラテン語の単語 *faustus* からとられているとする説(仮名説)がそれである。けれども、実名説と仮名説はこれだけにとどまらず、ことに仮名説には諸説がある。このように、「ファウストか、ファウストゥスか」という問題は、十六世紀にまで遡ると、単

なる表記の問題ではなく、熟考を要する論題となる。このような事情に鑑み、十六世紀の文献からの引用のなかでは、原語に忠実に「ファウストゥス」、論述のなかでは、簡潔を尊び「ファウスト」、と記した。なお、目下、「ファウストか、ファウストゥスカ」と題する小論を準備している。

注

(1) ファウストという人物、正確にはゲオルク・ファウストゥス (Georg Faustus) の歴史的事在は今日次の八つの文書によって裏付けられる。

一、ヨハネス・トリデーミウスの、一五〇七年八月二十日、ヨーハン・ヴィルドウング宛の書簡

二、コンラードゥス・ムチアーヌス・ルーフスの、一五二三年十月三日、ハインリヒ・ウルバーヌス宛の書簡

三、パンベルクの領主司教の会計簿、一五二〇年二月十二日の記載事項

四、インゴルシュタット市参事会の、一五二八年六月十七日の記録

五、キリアーン・ライプの気象日誌、一五二八年七月の記録

六、ニュルンベルク市の、一五三二年五月十日の記録

七、ヨアヒム・カメラリーウスの、一五三六年八月十三日、ダニエル・ステイバーリーウス宛の書簡

八、フィリップ・フォン・フッテンの、一五四〇年一月十五日、モーリッツ・フォン・フッテン宛の書簡

これらに加えて、フィリップ・メランヒトンの『語録』(注(30)参照)およびツィンマーの年代記(注(83)参照)もそれぞれ実在したファウストの生年と没年を推定する際に助けとなる資料である(注(24)も参照されたい)。なお、これらの資料にもとづく、実在したファウストに関する研究を、現在準備している。

(2) 原則として、簡便のため、ファウスト本と略記するが、文脈の関係から、『ヨーハン・ファウストゥス博士の物語』と書く場合もある。なお、ファウスト本の表題紙には、正確には次のように書かれている。まず、原文のまま引用する。

,HISTORIA/ Von D. Johaḥ/ Fausten, dem weitschreyten/ Zauberer vund Schwartzkünstler./ Wie er sich gegen dem Teuffel auff eine be/ randte zeit verschrieben. Was er hierzwischen für/ seltzame Abenteuer

gesehen, selbs angerich-/ tet vnd getrieben, hiß er endlich sei-/ nen wol verdienten Lohn/ empfangen./ Mehr er-
theils auß seinen eygenen hin-/ derlassenen Schriften, allen hochtragenden, fürwitzigen vnd Gottlosen
Menschen zum schrecklichen/ Bayspiel, abscheurlichen Exempel, vnd treuw-/ hertziger Warnung zusammen gezo-
gen, vnd in den Druck ver-/ fertiget./ IACOBI III./ Seyt Gott vnderthänig, widerstehet dem/ Teuffel, so
fleuet er von euch./ CUM GRATIA ET PRIVILEGIO./ Gedruckt zu Franckfurt am Mayn./ durch
Johann Spies./ (roter Strich)/ M. D. LXXXVII.“ 斜線は15の變むら田を、半田をよむら田の語は、原本では未だ印刷や
れじらぬと記す (Vgl. Volksbuch, S. XLVI-XLVII)。

訳せば、次のようになる。

「ヨーハン・ファウストゥス博士の物語、この悪名高き魔術師、妖術師が、いかにして悪魔に一定時を期して身を売ったか、
そしてその間にいかなる奇異な出来事を見、みすから惹き起して、おこなひ、ついに当然の報いを受けたか。すべからず、高慢
な、好奇心強き、不信仰なひとびとに対し、恐ろしき実例、畏むべき範例、誠実なる警告として、大部分彼自身の書きのこし
たものより集め、印刷に付した。ヤコブ書第四章、汝ら神に服へ、悪魔に立ち向へ、さらば彼なんぢらを逃が去らん。恩恵と
特権をもって。フランクフルト・アム・マインにて、ヨーハン・シュピースにより印刷せらる。(行間に赤線一五八七年。)(1)
なお注(38)も見られたらう。

- (3) ファウスト伝説の生成における「転用」については、本文「魔物の犬」に関する考察のなかで扱う。
- (4) ファウスト伝説を分類、区分するにはいくつかの方法——たとえば、モチーフによる内容的分類——が考えられるが、こ
では本論の主たる研究対象であるファウスト本に照準をあわせた、時間的区分をおこなっている。
- (15 a) Kieseletter, Carl: *Faust in der Geschichte und Tradition*. Neudruck der Ausgabe 1893. Osnabrück 1983. S.
21 の転載。
- (15 b) Kieseletter: a. a. O., S. 20 の転載。
- (6) Kieseletter: a. a. O., S. 20 より訳出した。
- (7) Kieseletter: a. a. O., S. 21 より訳出した。
- (8) ファウスト本には一五九八年までに全部で二十二の版(もしくは異本)が存在する——但し、外国語の版は除く——が、こ
れらはフリードリヒ・ツァルンケによって次のように分類されている。

ファウスト本とファウスト伝説の研究(金山)

A類＝一五八七年の初版および同年のうちに出されたこれと類縁の版

B類＝八つのあらたな章をもつ版(章の配列にも変更が加えられ、また、いくつかの章において書き換えや書き入れがおこなわれてゐる)

C類＝六つの章(ヘルフルトを舞台とする五つの章とライプツィヒを舞台とする一章)が付加された版

D類＝A類のものにC類のものを組み合わせてつくられた版

E(類)＝韻文の版(一版のみ)

従つて、一五八九年の版はC類に属する。A～Eそれぞれの詳細については、次の文献を参照されたい。

Zarncke, Friedrich: Kleine Schriften. Bd. 1: Goetheschritten. Leipzig 1897. S. 258-271 u. 272-289.

- (9) Das Volksbuch vom Doctor Faust. (Nach der ersten Ausgabe, 1587.) 2. Aufl. hrsg. von Robert Petsch. Halle 1911
(以下「 Volksbuch」を略記する)、S. 147 f. を参照。

- (10) 注(8)を記す。

- (11) Vgl. Kiese Wetter: a. a. O., S. 22.

- (12) Stromer, Heinrich

- (13) キーゼヴェターとケオルク・ヴァトロンスキは、明らかに、絵に付された詩句、それもラテン語で書かれた二行詩に注目してゐる。すなわち、そこにはすでにファウストの悲惨な死が内容として含まれてゐるのだが、実在したファウストが死んだのは一五二五年から十年以上もたってからのことであり(注(24)参照)、一五二五年の時点では、現にファウストがまだ跳梁してゐることが広く知られてゐた。このことから、右のふたりの研究者は一五二五とさう数字の虚偽性を主張してゐる。

Vgl. Witkowski, Georg: Der historische Faust. In: Deutsche Zeitschrift für Geschichtswissenschaft. N. F. Jg. 1. 1896-1897. H. 4. S. 325; Kiese Wetter: a. a. O., S. 21.

なお、アウエルバッハの酒場を舞台とするファウスト伝説に関しては、注(5a)に挙げたキーゼヴェターの研究書からとくに学ぶところが多かった。

- (14) ゲーテの『ファウスト』の底本として、

Goethes Werke. Hamburger Ausgabe. Bd. 3: Dramen I. 10. überarbeitete Auflage, durchgesehen und kommentiert von Erich Trunz. München 1976.

を用い、訳文は、相良守峯博士のものを、二巻より成る次の書から借用した。

ゲーテ作、相良守峯訳『ファウスト 第一部』および『ファウスト 第二部』(岩波文庫 一九五八)以下同様。

- (15) Volksbuch, S. 152 f. より、道家忠道訳・編『ファウスト その源流と発展』(朝日出版社 一九七四)の三一三ページを参照して、訳出した。

(16) 「悪魔の化身としての犬」すなわち「魔物の犬」は、十六世紀においてはまだ、それが基礎となつてある内容を構成していくという性格のものではなく、いわば話の一回的な一片、私の便宜的表現を使えば、説話構成要素にとどまっている。次の「悪魔の化身としての悪」についても同様。

- (17) 本文、次の段落を参照のこと。

(18) 十六世紀のいくつかの文書のなかに、「ファウストの恐ろしい最後」への言及が見出されるが、初期のものはきわめて簡略であり、マンリウスによって編纂されたメランヒトンの『語録』において、「ファウストの恐ろしい最後」のモチーフ化したことが確認される(本文一六三ページ参照)

(19) そつであれば、はじめから「ファウストと悪魔との契約」は挙げなければならぬかという声があがるかもしれないが、ファウスト文学一般におけるこのモチーフの重要性に鑑み、一旦提出したうえで、理由を述べて取り下げるといふかたちをとった。

- (20) 次の二つを参照。

Meyer, Wilhelm: Nürnberger Faustgeschichten. In: Abhandlungen der k. bayer. Akademie der Wiss. I. Cl. XX. Bd. II. Abth. München 1895, S. 5-11.

Baron, Frank: Faustus. Geschichte, Sage, Dichtung. München 1982, S. 66-68.

- (21) 本文一六九ページを注(69)を参照のこと。

(22) Gast, Johann: Tomus secundus convivialium sermonum, partim ex probatissimis historiographis, partim exemplis in numeris, quae nostro saeculo acciderunt, congestus, omnibus verarum virtutum studiosis utilisimus. Basileae 1548.

- (23) Vgl. Henning, Hans: Faust als historische Gestalt. In: Goethe-Jahrbuch. N. F. 21. Weimar 1959, S. 128; Witkowski: Faust und die Faust-Tradition. In: Faust und die Faust-Tradition. Weimar 1959, S. 128; Witkowski: Faust und die Faust-Tradition. Weimar 1959, S. 128.

ski: a. a. O., S. 332; Kiese Wetter: a. a. O., S. 22.

- (24) 今日、実在したファウストの没年に関しては、ツィンマーの年代記の記録をもとにされた、一五四〇ないし四一年を挙げ、ハンス・ハニングの説が有力である。しかしながら、この年代記の信憑性には疑いをもたれる点もある（本文一五八一—一五九ページ参照）ことから、フランク・パローンは、フィリップ・ベガルディの著作に見出される記述（本文一五〇—一五一ページ参照）にもとづいて、実在したファウストは一五三六年から一五三八年までの間に死亡した、としており、この説も退けたい。その結果、本論では、「一五三六年から一五四一年までの間のある時期」という表現にとどめた。

Vgl. Henning: a. a. O., S. 130-132; Baron: a. a. O., S. 44.

- (25) カスト自身が記してゐる通りに、彼が実在したファウストに実際に会ったのであれば、二つの説話のうちすくなくとも一方は、実在したファウストの生前すでに書かれていたという可能性も否定することはできない（次ページの引用を参照のこと）。
- (26) Kiese Wetter: a. a. O., S. 23 f. への訳出した。
- (27) Trithemius, Johannes (1462-1516).
- (28) Agrippa von Nettesheim, Heinrich Cornelius (1486-1535).
- (29) Vgl. Petsch, Robert: Der historische Doctor Faust. In: Germanisch-Romanische Monatsschrift, Jg. 2, Heidelberg 1910, S. 103; Kiese Wetter: a. a. O., S. 34; Baron: a. a. O., S. 59 f.
- (30) *Locorum communium collectanea, a Johanne Manlio per multos annos pleraque tum ex lectionibus D. Philippi Melanchthonis tum ex aliorum doctissimorum virorum relationibus excerpta.* Basileae 1563.
- この文献を、本論では、『語録』の語彙として用いた。
- (31) Witkowski: a. a. O., S. 346（オランダ語原文）への、Henning: a. a. O., S. 112（初期新高ドイツ語訳）ならびに Kiese Wetter: a. a. O., S. 29（新高ドイツ語訳）を参照して、訳出した。
- (32) Vgl. Baron: a. a. O., S. 58.
- (33) マンホーターマンレスは、ファウストを世界旅行に連れて行くときに、一時的に馬に変身する（本文一四七ページを見よ）。
- (34) Meyer, Wilhelm: a. a. O., S. 37.
- (35) Kiese Wetter: a. a. O., S. 22 f. への訳出した。
- (36) Vgl. Henning: a. a. O., S. 130.

- (37) 注(38)を見られたら。
- (38) ファウスト本の底本としては
Das Volksbuch vom Doctor Faust. (Nach der ersten Ausgabe, 1587.) 2. Aufl. hrsg. von Robert Petsch. Halle 1911
[Volksbuch への略記にN.]
を用いた。次のものも参照した。
- Deutsche National-Literatur. Hrsg. von Joseph Kürschner. Bd. 25: Volksbücher des 16. Jahrhunderts. (Hrsg. von Felix Bobertag). Stuttgart, o. J., S. 73-285 [Faust]
- 本文、引用のあとに付した括弧内の数字は、前者スニッチェ編のチキストによるページを示す。なお、和訳に際しては、道家忠道訳・編『ファウスト その源流と発展(付・民話本「ヨーン・ファウスト博士の物語」)』(朝日出版社 一九七四)一三七—二八九ページを参考に、あるいは道家訳をそのみず借用した。道家訳に部分的にでも変更を加えた場合には*印を、ほぼ全体的に論者自身の訳になつてゐる場合には**印を付した。以下同様。
- (39) ゲーテのメノニスターフェレンと題の脚玉の關係にまつては、柏原守肇博士の草稿書(注(14)を見よ)の「註」にまづば普請されたら。
- (40) Vgl. Deutsche National-Literatur. Bd. 25. S. 224, Fußnote 31.
- (41) 本文一四三ページを見られたら。
- (42) 十五、十六世紀のドイツ語散文、とくに民衆本の文章によつてゐる類語(もしへは同義語)の反復。原文では、„ein schön herrlich Pferd!“
- (43) Deutsche National-Literatur. Bd. 25. S. 247, Fußnote 21.
- (44) Volksbuch, S. 84, Fußnote 1).
- (45) Vgl. Volksbuch, S. XLVI-XLVIII.
- (46) Index Sanitatis. Ein Schöns vnd vast nützlichs Buchlein, genant Zeyger der Gesundtheyt. — Durch Philippum Begardt der freyen Kunst vnn Artzney Doctoren, der zeit der Löblichen Keyserlichen Reichstatt Wormbs Physicum vnd Lehartzet. Wormbs 1539.
- (47) ノルマンヌス [Paracelsus, Philipp Aureolus Theophrastus (1493?-1541)] のこと。

(48) Kieseletter: a. a. O., S. 27 f. への訳出した。

(49) ルターは、一五三〇年代の二つの Tischenreden のなかで、ファウストのことに言及している。(本文一五八一—一五九ページを参照のこと)

(50) ツィンマーの年代記には、「彼〔ファウストゥス〕が遺した書物は、シュタウフェンの殿様——その領内で彼は死んだのだが——に手交されたということであるが、その後多くのひとびとがそれらを手に入れようとし、また、私の考えでは危険で不吉なままものであるそれらを切に求めたのである」(Kieseletter: a. a. O., S. 56 より訳出)とある。このような報告を踏まえてはじめて、すでに引用した表題紙のことは「大部分彼自身の書きのこしたものより集め」の意味が理解されよう。この表題紙のことに呼応する箇所として、『ヨーハン・ファウストゥス博士の物語』のなかから、次の五つが抜き出される。

(一)「彼が地獄で、そして目を眩まされて見たこの物語を、彼、ファウストゥス博士は自分で書きしるした。彼の死後、紙片に書いたそういう自筆のものが、ある本のなかに隠されていて、発見された。」(五四)*

(二)「次の話も、彼のところで発見された。自筆で書かれ、しるされたもので、それは仲のよい仲間、ライプチヒの医者ヨナス・ヴィクトルに宛てたものである。その書きものの内容は次のとおりである。」(五四)

(三)「この悲しみはファウストゥス博士の心を動かして、その嘆きを、忘れないように書きしるさせた。以下は、彼の書いた嘆きの一つである。」(一一二)

(四)「彼らはまた、前にも述べられているように、ファウストゥスの物語が誌され、彼によって書かれているのを見出した。彼の最期をのぞいてすべてであり、最後のところは上に述べた学生たちや学士たちがつけ加えた。」(一一二—一一三)*

(五)「ところで、私がこの二十四年間におこなった冒険について言えば、諸君はそのすべてが私の死後書き誌されているのを見出されるでしょう。」(一一九)

(二)における「彼」はファウストゥス博士、(四)における「彼ら」は、ファウストゥス博士の死の場面に登場した学生と学士たち、を指す。また、(五)はファウストゥス博士の発言。

(51) 宗教的教訓的効果。これについては、本文一六六ページを参照されたい。

(52) 都市・まち・村の名称のカタカナによる表記は、原則として、今日の一般的表記によっている。

(53) 第五十八章および第六十章では、Wittenberg、それ以外の章ではすべて、Wittenberg となっている。

(54) 第四十四章 a では、Witzburger、すなわち、形容詞のかたち、ででている。なお、第四十四章は、44と44 a の二つに分け

- ふはじろ (Vgl. Volksbuch, S. 87-90)。
- (5) 第二十五章では、飛騨國 Constaninopolitanisch(en) の民謡である。
- (56) 蛇足ながら、ザンツは、オーフヘンとゆひ、ハンガリーの都市である。
- (57) マイン河畔のフランケンフルトを指す。
- (58) ヴィテンスルックの近村。
- (59) フライブルクの近村。
- (60) Schedel, Hartmann: Buch der Cronicken vnd gedechtnus wirtigen geschichte vó anbegyn d' wert bis auf dise vnßere zeit... Nürnberg 1493.
- (61) Vgl. Historia D. Johannis Fausti des Zauberers nach der Wolfenbütteler handschrift nebst dem nachweis teils ihrer quellen, hrsg. von Gustav Milchsack, Wolfenbüttel 1892, S. XXII-LIII.
- (62) Vgl. Volksbuch, S. 56-57 u. 69-71.
- (63) 国名・地方名もすべて実在のものであるが、これにまつての調査結果は、示すところからして煩雑になるのを、割愛する。
なお、物語のまえに付された二つの序になつてゐる都市・まち・村の名称は次のとおりである。第一の序では、出版者ヨハン・シュピースによつて書かれた献詞には、マインツ (Meinztisch(en)) のかたぢ、ケーニヒシュタイン (Königstein)、シュパイアー (Speyer)、ウルゼル (Vrsel)、フランクフルト・アム・メイン (Frankfurt am Main) —— これも実在する(こと)のものである。第二の序では、ファウスト本の著者によつて書かれた「キリスト教徒の読者への序言」には、ティロ (Tyro)、シドン (Sydon)、ソドマ (Sodoma)、ロザムト (Chorzim)、ベツナイダ (Bethsaida)、カペナウム (Capernaum) —— これも聖書に登場するものである。(ただしこの順に列挙した)。
- (64) 注(8)ならびに Volksbuch, S. LIV-LV を参照のこと。
- (65) Kluge, Friedrich: Fausts Zaubertoff. In: Fr. Kluge, Bunte Blätter. Freiburg i. Br. 1908, S. 93 より訳出した。
- (66) すでに言及したやうに、『ヨハン・ファウスト博士の物語』は、ひとりの作者の創作によつて成立したのではなく、種々の説話を集めてつくられたものである。しかも、『ヨハン・ファウスト博士の物語』には、ファウスト本に先行するいくつかの稿本があった。たとえば、注(61)に挙げた文献におさめられたテキストは、ファウスト本に先行すると考えられている、現存する唯一の稿本(ヴォルフヘンビュテル写本)のテキストである。従つて、一五八七年のファウスト本の著者

イコール『ヨーン・ファウストゥス博士の物語』の原著者ではない。なお、ファウスト本の著者についても、物語の原著者について、誰であるのかわかっていない。

(67) 「フアン・ヘリンゲン」が町ではなく馬の名まえであるという見解は、フリードリヒ・クルーゲによってすでに出されているが(注(65)参照)、『ヨーン・ファウストゥス博士の物語』に付与された実録という体裁への言及、作中にあらわれる都市・村の名称に関する調査とその結果の提示、ならびに物語に含まれる地誌的要素の指摘は私自身のものであり、これらにたいして、問題の仮説を、総合的に検討し、証明したところに、私の考察の独自性がある。

(68) 本文一四三ページを記す。

(69) Luther, Martin: Tischreden Oder Colloquia. Eisleben 1566.

ルドルフ・キセウェッテ: a. a. O., S. 35 への訳出した。

(70) Kieseewetter: a. a. O., S. 56 への訳出した。

(71) 注(20)を記す。

(72) Zimmer, Graf Froben Christoph von

(73) Müller, Johannes

(74) Vgl. Kieseewetter: a. a. O., S. 56; Baron: a. a. O., S. 44-46.

(75) Vgl. Henning: a. a. O., S. 131 f.

(76) ルドルフ・ハルトマン, Horst: Faustgestalt - Faustsage - Faustdichtung. Berlin 1979, S. 153 への訳出した。

(77) カストの『癸卯年の表示は第一編に記す。注(22)を参照のこと。

(78) 注(20)を記す。

(79) Weier, Johannes: De Praestigijs Daemonum. Von Hexerei, Zauberei.. Cleve 1568.

(80) Hendorff, Andreas: Promptuarium Exemplorum. Historien vnd Exempelbuch. Leipzig 1568.

(81) Büchner, Wolfgangus: Epitome Historiarum Christlicher Ausgesesener Historien vnd Geschichten. Weimar 1576.

(82) Leichner von Steinfeld, Augustin: Christlich bedencken vnd Erinnerung von Zauberey, Wöher, was, vnd wie vielfältig sie sey, wem sie schaden könne oder nicht: wie diesem laster zu wehren, vnd die, so damit befaßt, zu bekehren, oder auch zu straffen seyn. Heidelberg 1585.

- (83) Zimmerische Chronik. Hrsg. von Karl August Barack. Bd. 1 u. 3. Tübingen 1869. (Bibliothek des Literarischen Vereins in Stuttgart. Bd. 91 u. 93).
- (84) Vgl. Witkowski: a. a. O., S. 339.
- (85) Witkowski: a. a. O., S. 346 (フチン語原文) の、Henning: a. a. O., S. 111 (初期新高ドイツ語訳) ならびに Kiese-wetter: a. a. O., S. 29 (新高ドイツ語訳) を参照して、訳出した。なお、この引用部分のあとに、本文一四四ページにおいて引用した箇所「魔術の無益なについての小さな本を書き……」が続く。
- (86) Ziefer の古高ドイツ語——竹内豊治氏の訳注による。注 (87) を参照のこと。
- (87) Kayser, Wolfgang: Das Grotteske. Seine Gestaltung in Malerei und Dichtung.
訳文は次のものから借用した。
ヴォルフガング・カイザー著・竹内豊治訳『グロテスクなもの』(法政大学出版局 一九六八) 二五四ページ。
- (88 a) 注 (2) に示した表題紙のことは、ならびに注 (88 b) を見よ。
- (88 b) 第一の序である、出版者ヨーハン・シュピースによって書かれた献詞には、「ところがついに最近、シュパイアーのある親しい友人からこの物語が伝えられ、送られてきました。その要望するところでは、私がこれを、悪魔による詐欺、肉体と魂の殺害の恐ろしい実例として、すべてのキリスト教徒に警告するために、公に印刷して発表し、示すようにとのことでした」(四) とあり、第二の序、すなわちファウスト本の著者によって書かれた「キリスト教徒の読者への序言」には、「ところできたすべてのキリスト教徒、否、理性にたよるすべてのひとびとが悪魔とその企てをよりよく知り、それに対して身を守るすべしを得るよう、私は、学識ある、思慮ある二、三のひとびとの助言によって、ヨージン・ファウスト博士の恐ろしい実例、彼の魔法のわざがいかなる恐ろしい結末に相成ったかをはっきり示そうと思つたのである」(一〇) とある。表題紙に關しては、注 (88 a) で指示。
- (88) Vgl. Volksbuch, S. 158-217.
- (90) 注 (89) に同じ。
- (91) 掘越孝一訳『中世の秋』、世界の名著 55 ホイジンガ (中央公論社 昭和四二年)、四一七—四四九ページ、とくに四二〇—四二八ページの「ならびに」Henning, Hans: Das Faust-Buch von 1587. Seine Entstehung, seine Quellen, seine Wirkung. In: Weimarer Beiträge. Jg. 6. Weimar 1960, H. 1, S. 35, Fußnote 29 を参照。

- (102) Vgl. Volksbuch, S. 100-102.
- (103) 本文一四五―一四六ページを再読されたい。
- (104) 原文では „Luxhaim im Wassichin“。Wassichin は Wasgau のことであり、Vogesen の旧名。また、この話が実在したファウストとは無縁のものがあることはすでに述べたところである（本文一四六ページ参照）。
- (105) Kieseletter: a. a. O., S. 23 より訳出した。
- (106) 次の段落の引用を参照されたい。
- (107) 注（1）および（93）を見よ。
- (108) ここでは、訳文は、日本聖書協会、文語聖書から借用した。

〔補注〕（ ）と「」はともに補足的説明に用いた。ただし、引用文中の（ ）内のことばは原典による。